方向

十四

＊

原田禹雄

石の仏　1

＊

原田憲雄

灰色の雲　7

腐れ縁　10

貝の車　11

濁酒半壺　横寿近畿歌句集　13

雲母陣　(一)　15

王昌齢伝　(一)　26

＊

正誤　92

＊

石の仏

原田禹雄

ゆたかであるはずの大河も、夏枯れの広い河原をむきだしにして、光る流れはやせていた。ひるすこし前の熱気の中で、私は、かなり疲れていた。いや、私だけではない。車を運転している小川さんも、その隣の藤田さんも、それに、私の横の松野係長にしても、やはり疲れているのであろう。私は園を出てすでに十日目、そして、この県庁の人にしてもすでに五日目の仕事であった。互に無口になってしまっていた。そして、互にいたわりあうことも忘れてしまっていた。それは単に体の疲れというだけのものではなかった。仕事は大づめをむかえていたけれど、次の家は、たしかに心理的にも負担であった。つまり、いわゆる「一時帰省のこげつき」というケースであった。しかも、九年前に一度帰省したきりで　病型も病勢も一切不明というからには、もし、ういの型でもあれば、帰園という措置も講じなければならなくなるかも知れない。第一、もし悪化しておれば、九年間も放置しておいたK園の当局者の責任ということさえ、やはり考えねばならなくなるかも知れないのであった。

河の堤の上から、かなりそれたところに、その家はあった。深緑の生垣はよく手入れされていた。みるからに快い　静かな農家のたたずまいであった。しかし、石だたみの道をたどって玄関に立った私に、ひどく異様な石仏の群れがその前栽に見られた。石仏には石仏の寂かさがある。しかし、その石仏は　みな真新しい赤い前垂れをして何かひどく不調和な感じであった。野の仏

は、平素大抵放置されており、それなりのおちつきがあるものなのに、その石仏には　そうしたおちつきはないのである。京都に生れて育った私は、こうした仏の群れはいくらでもみている。化野であれ、清水であれ、あちこちの寺であれ　野の片隅であれ、石の仏はあるのだが　どにかく　その家でみた石の仏の群は、あまりにもひどく尊ばれすぎている感じであった。しかも、その石の仏の前に、ひどく敬虔にひざまづいている主婦を見るに及んで、いよいよ奇異な思いが深かった。

その主婦は　四十歳に近い人であった。藤田さんが来意を告げるとひどく思いつめた顔で、私たちを座敷へ案内してくれた。七十歳をすぎた老人をみたとたん、私の疲れは一度に霧散した。眉毛があったのである。類結核型の完全に吸収した形で　右足にごくわずかな筋萎縮と知覚脱失をのこしているだけであった。

「完全になおっております。園にもどる必要は毛頭ありません。薬をのむこともいりません。私自身の治っている診断書をさしあげておきますが、いずれK園から軽快退所という形にしてもらいましょう。」

という私の話を、その老人よりも、その主婦の方が涙を流してよろこんでくれたのであった。松野係長も藤田さんも、感謝をひらいて

「よかったですね。」

と、その主婦にくりかえし声をかけた。

とてもくつろいだ気持で　その縁先でお茶のご馳走になった。縁先からみても、例の石仏は、

何かぎょうぎょうしい様子である。

「ご信心ですか」

と問いかけた私に　その主婦はこんな話をしてくれた。

その人は　婚期を逸した。そしてさる所で働いていた。そうしているうちに縁談があった。その人の姉にあたる人も　いい話ではないかと言ってくれた。相手の男性は、中農の再婚。老人の父親と、母を失った男の子二人がいる。相手の人は、ひどくキマジメな人にみえた。それに小さい男の子二人もひどく気に入った。父親という老人は　殆ど何もしゃべらぬ人で　気の弱そうな方だなと思った。婚期をのがした自分にしては　大そういい縁談であったので、結婚した。結婚して二日目に、その人の姉が、ひどくあわててやってきた。旦那さんの父親がらいであることがわかったというのである。それで、すぐ結婚を解消してほしいという思いがけぬ話であった。

さすがにその人はおどろいた。幸い籍はまだはいっていなかった。「何故、それをかくしていたのか」と、夫たる人をその人は見つめていた。夫は、何も語らなかった。姉は　その沈黙の夫を、はげしい口調でせめたてた。姉は、ともかくも、その人をつれてかえると主張した。その人は、自分の部屋へゆき　だまって荷づくりをした。当座のものをまとめ、あとは誰かにとりにきてもらうのだと　姉は勝手にそうきめているようであった。荷づくりをしているその人に　不意にとびついてきたのは、二人の男の子であった。泣きじゃくっていた。「お母ちゃん、行ったらいや」とそのなさぬ仲の子は二人とも、その人にすがりついた。その人をにぎりしめ、死んでもはなさないような激しさであった。何かが、その人の心の中でくずれていったように思えた。そ

の人は男の子二人の手をひいて、姉の前に坐った。そして、きっぱりと、離婚はしないし、一日も早く籍を入れてほしいと言った。姉は らいの家族と一緒になるのなら、もはや姉妹の縁は切れたものと考えてほしいと言って帰って行った。姉とは縁が切れた。しかし、その日から、その人は 二人の男の子ができた。

夫はやさしかった。だが、その人をとらえてはなさぬものは 義父のらいであった。一体、義父の何がらいなのかはその人にはわからなかったが、義夫がらいであることを 夫もみとめるからには 疑いようもなかった。義父のらいがうつってもいいと思った。だが、夫や わが子に、いつからいがあらわれるのでは と思うと それはあまりにもむごいことであった。そうした苦しみが、その人を信仰にみちびいた。何も壮麗な神学にかざられた宗教ではない。オガミサン、クチヨセの類のセンセイという人におがんでもらったところが 供養もせずに捨てられている野の石仏を集めて供養すればよいとのことであった。それで、その人は そうした石仏に逢うと、それを家にはこんで供養した。

静かな日々はすぎた。夫も、子供も異常はなかった。義父も時に風邪をひいたりしたが 別にみにくくなりはしなかった。そんな日、突然 県庁から手紙が来た。封筒は私信のようであったが 中には、某月某日に県の指定医が診療にゆきますという文面であった。やさしい口調の文章が、かえって無気味であった。長年、何の連絡もしないでいて、突然、そんな形で診察に来るとは、ひどくむごい感じであった。その日が来た。夫は朝から、男の子二人をつれてどこかへ行ってしまった。義父は一体どんなことをされ、どんな風にあつかわれるかと思うと、たまらなかった。

その人は　石の仏におがむだけであった。
私の書いた診断書は、夫にみせた上で、姉に送るのだと、その人は明い顔を私にむけた。そして、こんなことを訊ねた。
「父は　私がとついで来たとき、なおっていたのでしょうか。」
「ええ、治っていたと思います。」
その人は、しばらく考えこんでいるようであった。
「らいが治るということがあるんですね。」
「ええ、昔から　ほうっておいても治る形がありました。あなたのお父さんも、幸い治る形の病気だったのです。」
私は答えながら、だんだん苦しくなってくるようであった。その人は口には出さなかったが、そうだとしたら、何故そのことを、K園の人が、義父におしえてくれなかったであろうか、夫に通知してくれなかったのか、という風に考えているのではないかと思えてきたからである。
その人は　らいから逃げようか、らいの中に進んではいろうかとまどったのである。そして、兄と義絶してまで、らいの中にはいってきたのである。ところが、そのらいが、実は治っていたのであったとすれば、その人の苦しみは一体何であったのであろうか。病気のこと、らいのことは、そう簡単に割切れはしないが　少くとも、りくつの上では、そうなるはずである。石の仏をおがんできたその人の日々を、私は、何か遥かなものをみつめるような思いで想像せざるを得なかった。

来るときとちがって、もどりの車の中は、大そう明るかった。松野係長も藤田さんも、その人に、ひどく感動させられていた。そして、その感動は、小川さんにもつたえられたが、小川さんも

「いい話ですね。」

と深くうたれた様子であった。ついの仕事をして、時に出くわす人のきらめきを　私たちはそのときに見出したのであった。松野さんは、

「いい話をきいたから、今日の午飯はひとつふんぱつしますか。」

といって、やや遠まわりをして　有名な川魚の専門店へ私をつれていってくれた。川のそばの大きい店であった。水槽の中を、うなぎがあふれるほどに泳いでいた。くつろぎながら、私たちはうなぎ丼をたべた。胃も心もみちたりた私たちは、再び車にのった。

「本当に　美談ですな。」

と、松野さんは反芻するように言った。私は余計なことではあったがこんな風に二たえた。

「たしかに美談ですね。あの人の美談に別に水をさすわけではありませんが、私たちの仕事というのは　こうした美談が生まれなくともすむようにするものだと思われるのですが。」

松野さんは、何度も何度も、私の言葉にうなづいてくれた。

老人は半ヵ月後、K園の軽快退所者になった。鼎の台帳からも消えた。そして、二度と私たちは、そこを訪れることはなかった。

×本稿は長島愛生園慰安会発行『愛生』本年一月号掲載のものを、関係者の諒解を得て転載。

灰色の雲

原田憲雄

風がもってきた雪は
時の間かがやいて
きえてしまった
梢のかげに身を寄せた
小鳥たちは
うなずきあっていたが
手もちぶさたな風が
どんぐりをゆすぶると
いっせいに嚇りだす

窓べの机に
墨をする
窓の外のきえた雪に
しめった土は
花をつけたことのない水仙の球根を
あたため
妻がまく茶の実は

目の大きな色の白い
となりの子が
掘りおこしてしまうだろう

夭折した唐の詩人の集に
朱を入れているうちに
いのちは蒸発してしまった
景宋本も
小鳥の囀りも
土の匂いも
筆も
それらはもう
わたしのものではない

犬がほえる
とおくで
あれは向かいの
三味線の師匠のにちがいない

この子も
むすめになったので　そろそろ
亭主がほしいんだね
師匠なら
そんなふうに言うだろう
妻はある日ふいに
涙をこぼした
そんなことをなぜ
思いだすのか

騒いでいた小鳥は
どこへ往ったのだろう
窓が暗くなった
わたしは庭に出てみた
灰色の雲が
北から南にむかって
ゆっくり
ひろがりはじめていた

1965.1.10

腐れ縁

蛇をわたしは好まない
そいつがわたしのなかにいる
ぬるぬる這いずりまわる
したりがおにとぐろを巻く
チロチロ舌はく
わかいときには龍になろうと
ひとなみに夢みたものだが
蛇のシッポで終る予感は
ちゃんと当時しこんでいた
夢やぶれ予感はあたる
いやらしい欲ぼけと、
気のちいさい人ぎらい
うんざりするほどながい
おつきあい
出てゆけとは今さらいえず
ぬいでは捨てぬげなくなった
ふるびた皮のなかで

貝の車

歯は抜け
目はかすみ
とぼんとしている
へんにいじらしく　あてつげがましく
死ぬまでつづきそうな　腐れ縁
滿更わるいものでもない

ホムンクルスはガラスの小人
成長したく
タレス　アナクサゴラスと
アイゲウス海の岩多き湾を
遍歴
プロテウスの海豚に乗り
波間で輝き
ガラテアの貝の車にぶつかって
燃え上がり
ひかり

1966.4.1

流れて散った
わたしの体も透明で
燃えるねがいや欲望が
みえるとすれば
ひとたちのあいだに出る気もすまい
成長なんぞしたくない
わたしの心は
みえないようにできていて
振りめもせずひとまえにいる
燃えあがり
ひかり
消滅できれば
どんなにこころ安らぐことか
「人間になってしまったら
お前はそれでおしまいなんだ」
プロテウスがガラスの小人にいった
タレスがいう
「まあそれはその時さ　その時代の

立派な人間になるのも
なかなか結構な話じゃないか」
哲学者はいつも尤もなことをいう

ガラテアの貝の車はいないか
不透明な体をくだき
わたしの心を燃えあがらせる

1969.5.30

濁酒半壷

櫟斎迂叟発句集

にせ隠者　櫟斎先生　さることありて世にそむき　草庵を結びけれども　もとより道心など爪の垢ほどもなき人なれば　草木を友とし魚鳥とたわむるるわざには　半刻にして倦めり　さりとて　そむかれし世の人これを勿怪の幸いと　再たび先生を迎へざれば いとまを消すにほとほと困じはて　思ひつきたるが　すなはち発句のまねごとなり　談林の滑稽と桃青が蕉風とは　ともに風狂のまことをのべしものなれど　先生は風雅にただす志なく　顧狂にうそぶかん情またなし　書生をきどりて嬉ひしまま突っ込みおきし巻々とりいで　ここかしこより　一つ二つ四つと言葉めすみ　結びあはせて　五七五と

調子あやしく綴りしもの　日に月に年につもれば　塵も塚となりしを　先生の子の敲木
ここに一巻にあみぬ　題して　濁酒半壺　とは　かの陶彭沢の眉をこそひそめ給ひなん
を　これまた　蛇尾山房の腐れ儒者阿仁なにがしの稿詩集に見つけし　獨酒半壺机邊亂
より剽竊せしといはば　笑ひてうち捨ておかんのみ　請はれて序するは　先生と菴なら
ぶる　　法　界　坊　先　月

うたたねの夢重うして蝶逝きぬ　　昭一六、五
蝶逝きぬ蘭書くゆさん衣そなき
梅雨あけて葵みにくき狭霧かな
花散りぬわれのsogitoのありやなし
くれぐれに浮島白う花あやめ　　昭一六　六
クぐれの別れともなき野道かな　　同
紫陽花や沓ぬぎ暗き小玄関
美しき花守病みて苑しとど
梅雨ごもり徒然草を読みはてぬ　　同
経寫す文字みだるるや桐の花　　不詳
わが耳朶にみづがね充たせ天狗宴　　同
粥杖やbootsの女うちはづし

雲母障

はじめに

「人しづまりて後　ながき夜のすさびに　なにとなき具足とりしたため、残しおかじと思ふ反古などやりすつる中に……」と、兼好法師が『徒然草』に書いている。若いころに書きちらしたものを整理して、残しおかじと思ふ反古などを破り棄て焼きすてるべき年配に、わたしも近づいたようである。雑誌『李賀研究』に『李長吉』周辺、と題する日記抄を連載したのは　その余は焼きすてるつもりだったのだ。ところが李長吉と限定すると取りあげにくいもので　しかしまあ残しておこうかというものもないではない。『李長吉』周辺　でさえ　読者には、こんなものがなぜかれに関わるのか訝られるであろうようなところもあろう。また今更こんな古くさい昔の反古を残すことは全くない、ともいえなくはない。そこまで考えれば　わたしは無用の人、その書きものは無用の文章で　昔と今とを問わぬ。だが世には無用を厭わぬ寛厚の長者があって　焼きすてる前に、なお幾らかを残せと　すすめられる。その芳情にこたえて、ここに若干　少年の日記を抄出する。既に抄出したものはここには載せず　ただ番号だけ与え　『李賀研究』の通巻何ページにあたるかを注記する。漢字　仮名づかいは　今の俗に従って改めた。油印本にはその方が便宜であるというのが、その主な理由である。題の「雲母障」は王維の少年の日の作にちなんだ。

一九七一年四月二十七日

1　日付を印刷した日記帳は　ひとを　あの日付の外にはみ出させないようにする。いつのまにかわれわれの思考は、十四、五行以上に出られなくなる。アランのように、短い文章のなかに彫しい光を凝結させている人もあるが　現在のぼくにとっては　溢れるにまかせて書き流すことのほうが大切なのだ。ダイヤモンド窘きは、短歌で結構。

二　三ページつけて、「無事」「本日も事なし」などと続き、まもなく白紙となる日記の多いのは、あの日記帳のもつ制約に対する反抗のあらわれなのだ。普通のひとは、そんな消極的な反抗しかできない。しかもそれを罪悪だなどと考えている。

2

3　遥かな谷。そこへの道はふきとざされている。人々はおまえに到ろうとしなかった。孤独な魂は、もう　生命を信じないかのようであった。風の音ばかりを聞いているうちに倦怠のなかで眠ろうとしていた。薔薇をさがしにやってきて　道を失ったわたしの迷いこんだのが、おまえだった。夢が教えた寂寥の谷がおまえであることを　そのときわたしはさとった。

薔薇は　育てなければならないものだ、とおまえはいった。寒く冷たいここではとうてい育つまい　ともいった。けれども、おまえのことばから　わたしはかえって信じる。夢がわたしの意志の影であるように　愛は薔薇の形をとって　この寂寥の谷に花を咲かせることができるのだと。

4

Tに誘われて　初めて碁をさした。離ればなれにおかれた石の群に　一つの石を投ずると　ふいに成立する一つの関係。ついで投ずる石は　これを破る。破られたところに他の関係が生れている。詩のようだ。人生のようだ、というほうがぴったりしているかもしれぬ。いくら考えても、わたしの石は動かぬ。定石のいくつかをTが教えてくれた。押韻法とそっくりだ。目の数はきまっていても、順列組合わせはほとんど無数に違いない。ただ組合わせにはいくつかのタイプがあって、それが定石とよばれるものであるらしい。できるだけ多くのタイプに精通した人が達人なのだ。

碁打ちと、観念を操作する形而上学者とは　それほど隔ったものではない。かれらはいずれも製図工には似ているが、大工には似ないように、思われる。わたしは大工のほうがすきだ。家が立ったら図面は捨てる。

5

ものを見るばあい、無意識に　判断の基準を上げ下げしているらしい。それはそれなりに美しい、とか、真実だ、とかいうことばが出るのは、そこからだ。

基準に釘をうて。そこから前進！

6　晴。こどもたちが着飾って街々巷々に輝いている。　－2

「おれには思想がない。他人の考えだけがことばを飾る。孔雀の羽をつけたカラスだ。自分が嫌になる」とMがいう。

「孔雀の羽だって、並べるには選択が働くだろう。カラスの思想がそこにあるのさ」わたしは

そういって　パスカルのことばを引いた。おまけにジイドの影響論まで。しゃべりながら、こいつは自己弁護になっていると思った。むしろMのことばを黙って聞いているべきだった。いちど口からすべらせたことばの辻褄をあわせるために、なんと偽りの持続に努力せねばならぬことか。

選択は価値判断の形式だ。そこにはたしかに思想が反映する。問題は、選択が本当におのれから出たかどうか、だ。

「影響されやすい人間ほど伸びる素質がある」とジイドがいう。そうには違いなかろうが　わたし自身はといえば、生半可にとりいれ　先入観でつくりかえ、出てきたものを固執している、のではないか。つまりは孔雀の羽を挿したカラスだ。カラスは背伸びしても孔雀にはならぬ。孔雀が古い羽をおとして新しい羽を育てるように、おのれもおのれの古い羽を捨てることをこそ、カラスが孔雀からうけた影響というべきであろう。

7

虚像と実像とは隔り　中間に鏡面が障碍する。虚像が実像に到達するためには、鏡面を破っておのれを消滅させねばならぬ。

8

Mと話していて、かれのことばが〝死〟につきあたった場合の自己〟にふれた。わたしは父の死、親しい人の死に対して、どのような態度がとれるかわからぬ。いつかはやって来ることだ。わたしは当惑した。不安であった。

9　晴・しぐれ・

「単純、卒直！」とロダンがいう。『マルテの手記』はリルケによって卒直に拾いあげられた単純なことばの群が醸し出す美しさをもっている。単純は幼稚ではない。卒直は無造作と区別されねばならぬ。おのれをなげうって自然に見入り、王水の知恵で不純を洗い流して得られる白金が単純だ。他人の眼鏡をかけないことが卒直だ。

感動すること、愛すること、望むこと、身ぶるいすること、生きること。ロダン

10

Eの手蹟はおもしろい。一字一字きりはなすと、粗雑な点と線とがいやいや結びついている。集合すると、ふしぎな繰りと諧調を帯び、なごやかに美しい古拙が成立する。まっすぐに力をこめて引かれた線。ぶちきられ、あるいは強くはねられた末端。意志。だが、幼い曲線がそれらをやわらげ、一字一字の構造と、群をつなぐ断続した息づきが、感情をひびかせる。

11

人生は本を読むことではないはずだ。わたしときたら　なにかの本で読んだおとなぶったことばを撒きちらし、ほめられると　もっと珍らしいことばを集めようと、読書に専心した。そんな暇に花や虫でも眺めるほうがよかった。ところで人は、自分のことばの一々に責任を感じながら物を言ったりはせぬらしい。いったん洩らしたことばは変更しようがないように信じるわたしは、おのれの虚栄が仕掛けたワナにはまってじたばたする猟師だ。

12

通俗小説のような天気だ。人々の会話も天気のようだ。わたしの気分も。

Kを訪うて『日本美術史講話』を返す。『榊原紫峰画集』を見る。「かけす」「赤松」そこには一羽のかけす、一本の赤松があって　画は消滅している。画業は生命を得た、といえるだろう。

13

愛に身を滅して悔いなかった冷泉為恭。光源氏、身を滅さなかった。光は政治家でもあったからな。

14

一乗寺から高野川に出、夢倉町まで歩いた。西陣界隈と何と違うことだろう。だが　林をきりひらき、田畑をつぶして、工場やみにくい住宅が建ちはじめている。嵯峨野もそうだ。もう五十年もしたら京都に木一本もなくなりそうだ。その時、人はいうだろう。自然を征服した、と。自然の消滅は精神の消滅ではないのか。

15

「明日」がすばらしくいい日のように思えるので警戒する。今日がおろそかになりそうだ。

16

亜流は先生より熱狂する。してみせる。それが先生への尊敬だと思うらしい。冷静に理解することなど問題外だ。

17

俗はげし。素気にわかに到る。

未婚者は既婚者であり得ない。既婚者もまた未婚者であり得ない。人は同時に二つの世界に住

むことはできない。

檻から飛び出せない虎のように、人間は、自己から飛び出せない魂のものうい姿を　神々の前にさらす。

18

おまえの絵は美しすぎる。落魄の光景にふさわない。それを、おまえの手で、なぜ描かないか。

19

女が　年下の男に　思いきって愛を告白する。男は思う。あの人は　幼稚なわたしを可哀そうに思い、あんな告白めいたことまでして、慰めようとするのではないか。もしそうなら、わたしを離れるがいい。わたしは　きみの犠牲に値しない。

20

親は、子の幸福を願ってその生涯の予定表をつくる。それが子にとっての不幸であることに気づかない。しっかりした子にとっては、反抗はまぬかれぬ。手ぎわよくやるか、否か、の違いはある。手ぎわ悪くやるほうがいいのだが……

21

若すぎることが　若すぎない者には思い及ばぬことも、考えつかせ、実現させることがあるものだ。若さは、しかし、特権ではない。

22

外界は、自分の見るものだ。だが見えた世界を表現しようとすると、制約にぶつかり、びっく

りする・感情をたやすく表現するのは、出来合のことばに妥協する人か　修練をつんだ人だ・後者は稀だ。

23

観念は人間に生れるものだ・生むためには人がまずその中にもぐり込まねばならぬ・生れるとひとり歩きして人間を軽蔑する。人はいつまでもその後を追いまわしていなければならぬ。

24

崇高もおき場をまちがえると滑稽になる。滑稽を恐れる人にその間違いをつきつけると諷刺になる・諷刺がみずからのトゲにほくそえまないとき崇高は回復する・例えばドン　キホーテ。

25

凝りかたまった信者ほど扱いにくいものはない。すべての教義を都合のいいように解釈する。たれかが反対すると、かれらは個人的な過失をあげ「こんな間違いをする人がまともなことをいうはずはない」という。

26

ドボルザークの成功は、アメリカ・インデアンの音楽をまねて「新世界」を作ったところにあるのではなく、あの感動を人の胸に醸し出す音の系列をインデアンの音楽に見出したところにある。とはいえ、インデアンの音楽がなければ、見出すこともなかったか、ずっと遅れたろう・無名のインデアン！

27

文章における文字は必須の制約だ。それあるがためにいくら我儘に飛びまわっても文章以外のものでありえずにいる。文章が文字を乗り越えようとすれば　たちまち、絵画か、音楽か、わけのわからぬ世界に転落しなければならないだろう。

28　1.12

すべては一回きりだ。

29

心がもっとも抽象的に入りうるのは音楽ではないか。

30　1.13

なんども、なんども、わたしの指が鍵盤の上を走る夢をみた。

31　参賀研究　35

32　1.18

M「夢を持っているだけでも、おまえは幸福だ」

僕「夢など見ない明晰な眼を持ったおまえは幸福だ」

33　1.19

授業はないが大学に行った。図書館は燃料不足でスチームはほとんど通らない。文学的修飾がお化けのように胸の中を行列していった。広い部屋に閲覧者七人。柱時計に斜めに「故障」と紙が貼ってある。Sが肩をすぼめて一心に読んでいる。文芸部の雑誌に甘い小説を書いた男だ。瞳トシテ其レ陰リ、悄然トシテ其レ霊ス。寂メテワレ寐ネラレズ、顧ウテワレ則チ懐ウ。二千年

の首、やっぱり鈍暗な空の下で、悲酸な未来をじっと見つめていた人もあるのであろう。わたしは図書館を出た。北風は叫んでいた。

34

ノブオは六叉にぎって電車道に立った。父の薬をとりにゆくのである。なかなか電車が来ない。ノブオは考えた。同じ六叉出すのならたくさん乗ったほうがいいや。ノブオは病院とは反対の方に歩き出した。次の停留所についても電車の姿が見えない。また歩いた。次の停留所は交叉点の向う側で電車が来ている。急いで交叉点を渡ると電車は出た。シマッタ。で　神妙に待つことにした。待つときには来ないものだ。いらいらして歩き出した。停留所近くになって電車が通りすぎた。ノブオはどんどん歩いた。

家に帰ると、待ちかねていた母がたずねた「えろう長くかかったんだね。故障でも起したのかい」ノブオは得意になって、七つ目の停留所でやっと電車をとらえた話をした。母はあきれかえった「バカだねえおまえは。それだけ病院のほうへ向って歩いたら、とっくに着いているんだよ」兄はこの話を聞いてノブオの無邪気に感心したけれど、黙っていた。

35

あが夫雄々し　くにのますらを　夫・妻とりて　王のみまへに
夫征きしより　われはやつれぬ　紅おしろいも　誰がためにせむ
雨の降る日も　空晴るる日も　夫のうへのみ　おもひて飽きぬ
野の忘れ草　庭に植ゑむか　夫おもふだに　あが心悼す

詩経　衛風　伯今

36

静かなひとよ、うるわしいひとよ　ひっそりと私を待っていてくれるのか　ひとよ、ひとよ、いとしいひとよ　そなたは何をためらうのか

静かなひとよ、うるわしいひとよ　丹塗りの筆をくれたひとよ　丹塗りの筆のめでたさ　そのやさしさの何と心にしみること

便りにつけておくってくれた　野の草つばな　はかない草のされどつばなは　ひとにつまれていみじさよ

北風　静女

37

今日も役所から帰って来てぐったり　思えば思うほど心がふさぐ　いつまでたっても見すぼらしい貧しい俺　俺のなげきを知ってくれるものなんぞありはしない　あゝあ、これも神様のおぼしめし　それにしてもこんな仕事をつとめはげんで何になる

あれをやっておけ、これをやっておけ　うるさい仕事はなんでもこちとらまわし　そして、どうだい　人の顔さえみればあのへなちょこ人事までがきみ、きみ、もっとテキパキやってくれなくちゃあ　下っ端のつらさ、神様のおぼしめしと努めはするが　さてはげんで何になる

次から次へうるさい仕事は増える一方。相もかわらず顔さえ見ればどなり散らすおえらが方　えいままよ、これも神様の思し召し　だが一体、こんなことをしていて俺はどうなる

北門

王昌齢伝（一）

はじめに

盛唐の詩人王昌齢の著作をはじめてわが国にもたらしたのは僧空海であるらしい。空海が唐から帰朝したのは、憲宗皇帝の元和元年（わが平城天皇の大同元年、西暦八〇六年）。かれは荷物の中から、公式に輸入した経典（文物をえらび、一覧表をつくり、「新請来経等目録」と題し、提出した。四年八月。）かれは京都に住し、嵯峨天皇が即位し、つぎの年八月。弘仁と改元され、天皇は学問好きだったせいか、さきの目録に記さぬ将来物についてしばしば下問し、空海はこれに応じて書籍などを進めた。その中に昌齢の『詩格』一巻と『王昌齢集』一巻がある。

『詩格』について弘仁二年の「献納表」にいう。

王昌齢詩格一巻。これはこれ在唐の日、作者の辺においてたまたまこの書を得たり。古詩格等は数家ありといえども、近代の才子は切にこの格を愛す。……わがわくは文をつづる士をしてこれを知見せしめたまえ。

この文は『性霊集』では「劉希夷が集に書して献納する表」となづけ、『高野雑筆集』では題はない。なお「詩格とは詩を作る法則をさす。

「作者の辺において」とはどういうことだろうか。作者昌齢からじかに貰ったように、少くと

もその近親または友人から手にいれたように感ぜられる書きかただ。しかし、空海在唐の日は、昌齢の死後ほとんど五十年にあたる。

空海は　帰国することにきめた元和元年、四月に「越州の節度に与えて内外の経書を求むる啓」を書き「三教の中の経　律・論　疏・伝・記ないし詩賦　碑銘・卜　医、五明所摂の教えの、もって蒙をひらき物をすくうも多少」を寄贈してほしいと訴えている。越州はいまの浙江省紹興。かれの乗船は八月である。船の都合もあったろうが、文物の最後の蒐集に時間がかかったのだろう。この間に土地の文人と交わり詩文の応酬がある。文中の三教は、仏教　儒教　道教。五明は、古代インドの五つの学科、すなわち、声明（文法　文学）、工巧明（技術　天文学）、医方明（医学）、因明（論理学）、内明（哲学　教義学）。

王昌齢が七年間つとめた江寧県は　江蘇省南京の衛星都市。越州と江寧県とは約二七〇キロメートルはなれ、距離的には比較にならないが、唐人の感じからすれば、われわれにとっての神戸と京都といったところではなかろうか。それなら昌齢の詩文が越州に流布していたと考えてよく、空海がかれの二著をこのとき入手したとすれば、著者にゆかりの地というほどの気持で「作者の辺」といったのかもしれぬ。

なお　明の胡文煥が編集した『格致叢書』に「唐王昌齢撰詩格」一巻を収めるが、引用の詩文に王昌齢以後の人の作がふくまれるところから　偽作だろうといわれる。

『王昌齢集』の名は　弘仁三年の「雑文を献ずる表」にみえ　やはり『性霊集』にのせるが『詩格』についてのような説明はない。けれども後に空海が著わした『文鏡秘府論』には、昌齢

の詩句を三十二回引用する。この論は、漢詩文の作法書で、中国の詩論家の説を抜粋編集し、昌齢の『詩格』も材料のひとつ。そこにひく詩文は立論を助ける目的で選ばれているのだが、昌齢詩への空海の関心の度合も反映していると考えてよいだろう。

ついでながら、『文鏡秘府論』の初稿は、大同四年（八〇九）から弘仁七年（八一六）までに京都高雄の神護寺でつくられ、空海が高野山に移り金剛峯寺創建にいそしむ業余に修正し、十年（八一九）かれの四十六歳前後に脱稿したのだろうと、小西甚一『文鏡秘府論考』が推定する。

空海が昌齢の説を日本にもち去った後ほぼ九百年たった清の聖祖の康熙四十六年（一七〇七）に『全唐詩』が初編された。当時の政府が集めうる限りを網羅した唐の詩の全集だ。そこに収める王昌齢の集には『文鏡秘府論』に引くかれの詩句の約三分の二がみえない。徳川の市川世寧『全唐詩逸』がこれを指摘する。世寧が逸詩と見、『全唐詩』に存するものも、二つ三つはあるけれども。

王昌齢は詩人として生前すでに甚だ有名だった。唐の終りごろ、人の好尚はかれの目ざしたものとは違う方向にすすむ。つぎの宋に入ると、前代の文献がさかんに蒐集され、かれの作も『文苑英華』などの総集に数首ないし数十首おさめられる。ところが、この時代に流行した詩話のたぐいには、かれの名があまり見えぬ。明治の伊藤子清白の作品が「現代文学全集」にはいっていても昭和の詩人がほとんど話題にせぬのと、いくらか事情が似ていよう。

明代に、古文辞を尊重する文壇の主流が、詩では初・盛唐を評価し、その機運にのって王昌齢の集も刊行される。ついで、清の『全唐詩』が、唐詩全体を一望しうる視野をひらき、かれの作はようやくかなり突っこんで検討されはじめたらしい。

わが国での読まれかたはどうか。空海が天皇に献じたとき『詩格』と『王昌齢』は、もとの本と 写しと、おのおの二部となり、それぞれがさらに抄写されただろうと思われるのに、いまは残っていないらしい。そののち徳川にいたるまで 昌齢の名をあげ詩句を引くものを、わたしのせまい知見の範囲では知らぬ。『文鏡秘府論』も言語学者のほかは読まず、印刷されても情況はほぼ同様。明の文苑の影響が時をへだててわが国の詩文家におよび、『文鏡秘府論』をひもとく人があらわれ、明刻『王昌齢詩集』が輸入 翻刻される。

王昌齢への関心の度合はこのようにさまざまだが、時と処をこえてほとんど変らなかった評価がひとつある。かれは七言絶句の名手で、そのいくつかは善を尽し美を尽す神品だというのが、それである。おそらく将来にも動かぬ定論だろう。

現存する昌齢の詩は断片も加えたら二百首をこえる。代表作とされるのが約二十首。うち七絶が半ばを占める。二十首のうちに入らぬものが 他の大家の作に必ずしも劣るわけではない。そのことはおくとしても、残された百数十首が、気にかかる。

神品を採って他を顧みないのは批評家の見識だろう。神品を生む詩人の心の動きに、わたしはより一層の興味をおぼえる。ひとの見捨てる作品も、詩人にとっては、善美の数十首を生むために経なければならない試行錯誤であったかもしれぬ。それを追うのは、海に流れた工場の廃水を分析するよりも回りくどい気がする。しかし、世渡りのあまり上手でなかったらしいこの詩人の足あとは、ジェット機が見すごし筏がたどる古代人の航跡に、似ていなくもない。迂路をさぐるうちに、あるいは納得のいく道筋で かれの神品に到達できようか。

王昌齢の詩集は　明の許自昌が校刻しわが享保十八年（一七三三）水玉堂が復刻し寛政八年（一七九六）皆川愚が増訂したものを底本とした。単に集というときはこれをさす。文は『全唐文』に拠った。集に逸する作　疑わしい文字は、『文鏡秘府論』唐人の逸唐詩『唐文粹』『唐詩紀事』『文苑英華』『全唐詩』などを参考する。引用の詩にそえるアラビヤ数字は底本の排列によってわたしの与えた一連番号で（　）内のものは『唐代の詩篇』（一九六四年）が設定　次『全唐詩』一連番号である。

譚優学「王昌齢行年考」（『文学遺産』増刊十二輯）などによる簡単な年譜をかかげ要約にそなえる。これは本稿を書き進めるうちに変更しなければならなくなるかもしれぬ。

簡　譜

王昌齢、字は少伯。京兆長安の人。排行（同族の同世代の年齢順）によって「大」、官職によって「校書」「江寧」「竜標」などとよばれる。祖先は太原（山西省）の出身らしい。弟に瑛と越（従弟に銷がいた。瑛は道士となり、その神秘性によって玄宗皇帝に信任され、粛宗皇帝の宰相となった。

則天武后の聖暦元年（六九八）に生れる。一歳。

玄宗皇帝の開元十一年（七二三）　二十六歳。天子が河東（山西省）に行幸し　昌齢に「駕は河東に幸す」がある。

開元十二年（七二四）　二十七歳。河　隴（甘粛省　青海省）にゆき、玉門関あたりまで足跡が及んだらしい。かれを有名にした辺塞詩はこのときの体験にもとづくだろう。

開元十三年七二五　二十八歳。河隴から帰り「扶風の主人の答えに代りて」を作る。
開元十五年七二七　三十歳。官吏登用試験の進士科に及第し、汜水県の尉となる。同時及第者に詩人の常建らがいる。汜水は河南省の嵩山の北、黄河南岸のまち。
開元十九年七三一　三十四歳。幹部選抜試験の博学宏詞科に合格。秘書省校書郎に遷る。
開元二十六年七三八　四十一歳。追放されて嶺南（広東省・広西省）にゆく。
開元二十七年七三九　四十二歳。大赦令の適用をうけたらしく、嶺南より巴陵（湖南省岳陽県）にゆき、秋、李白に会う。白はこの年三十九歳。
開元二十八年七四〇　四十三歳。襄陽（湖北省）に孟浩然を訪う。浩然が急死する。行年五十二歳。
玄宗皇帝の天宝元年七四二　四十五歳。江寧県（江蘇省）の丞となる。
天宝三載七四四　このとしから「年」を「載」と称する。四十七歳。しばらく長安に帰り　王維らと遊ぶ。維は四十六歳。
天宝七載七四八　五十一歳。竜標県（湖南省）の尉に左遷される。
天宝十四載七五五　五十八歳。安祿山が反乱する。
天宝十五載七五六　五十九歳。玄宗皇帝は長安の都を出奔し、蜀（四川省）に逃れ、太子が即位する。
粛宗皇帝である。至徳と改元する。
粛宗皇帝の至徳二載七五七　六十歳。やはり竜標県の尉だったらしいが、故郷に帰り、亳州（安徽省）刺史の閭丘曉に殺された。

出谷

巻のはじめに「鄭縣陶太公館中贈馮六元二」がある。開元十九年、博学宏詞科に合格し、地方官の汜水県尉から中央官の祕書省校書郎となって間もないころの作で　三十四歳の昌齢が、半生を回顧し　おのれの志向をのべる。かれの家集の序説とみなすことができよう。

鄭県は鄭城ともいわれ　陝西省華県の西北にあたり、唐代には華州の政庁があった。「陶太公館中」を和刻本は「陶太公ノ館中ニ」とよむ。陶は姓、太公は高齢者の尊称。しかし、この詩の陶氏に対する言葉づかいは　同年配の友人むきで、太公とよぶにふさわしくない。「太」を『唐詩紀事』『河岳英霊集』は「大」とする。それなら馮の「六」や元の「二」と同じ排行で　それぞれ、太郎、六郎　二郎というほどの意である。その方がよく、題は「鄭県の陶大が公館中にて馮六と元二に贈る」とよまねばならぬ。公館は官舎。陶氏は鄭県の役人で、昌齢がその官舎を訪ね　酒が出た。来合わせた馮と元のふたりとも話がはずみ、贈ったのがこの詩。三人がどういうひとかはっきりせぬ。陶氏については私見があり、後にのべる。王維に「元二の安西に使するを送る」という名高い詩がある。ここの元二と、あるいは関わるだろうか。本文にはいろう。

儒有輕王侯　　学者のなかにはいるものだ　王侯を軽んじて
脱屣當世務　　時政に参加せず自由であろうとするひとが
本家藍溪下　　わたしはもと藍溪のほとりに家居したが

非爲漁弋故　魚つり鳥うちのためではなかった
無何困躬耕　まもなく農耕生活に困窮し
且欲馳氷路　長い旅路につこうと思った
幽居與君近　わび住まいは君と近く
出谷同所鶯　谷を出て歩く道筋も同じだった
昨日辭石門　石門を去ったのは昨日のような気がするのに
五年變秋露　五年　秋の露が霜と変るのを見て来たのだ
雲龍未相感　雲と龍が感応しあうこともなく
干謁亦已疊　就職依頼の訪問もしばしばやった
子爲黃綬冪　君はいま黄いろい印綬に身をしばられ
余忝蓬山顧　わたしは蓬莱宮からお召しをいただいた
京門望西岳　都の門から西岳を望み
百里見郊樹　百里　街路樹を見つつゆけば
飛雨祠上來　雨は山の祠(ほこら)のあたりからしぶき降り
靄然關中暮　靄然として関中平野は暮れかかる
驅車鄭城宿　車を駆って鄭城に一夜の宿を乞うたのは
秉燭論往素　燭をかかげて過去　現在を論じたかったからだ
山月出華陰　山の月が華陰からぬっくり出て

開此河渚霧　この黄河の渚の霧をうちひらく
清光比故人　清らかな光は親しい友にそっくり
豁達展心晤　からりと心はれて語りあうたのしさ
馮公尚戢翼　馮さんはまだ翼をとじた大鳥
元子仍跼步　元くんはなお走り出さぬ駿馬
拂衣易爲高　衣の塵を払って去れば高尚な生き方はできようが
淪迹難有趣　世に隠れて沈没というのも趣きがない
張范善終始　張良と范蠡とは出処進退あざやかだった
吾等豈不慕　われら　どうして慕わずにおれようか
罷酒當涼風　酒はおしまいにして涼しい風にあたろうよ
屈伸備冥數　屈まるも伸びるも　運命だろうさ

001（6684）

「およそ道術あるはみな儒となす」と『漢書』司馬相如伝の注にいう。『説文』の段玉裁注に鄭目録をひいて「儒は濡なり。先王の道をもってよくその身を濡おす」というのはしかつめらしいが　道術はひろく道徳学術をさし、儒は学者一般を称するとみてよかろう。昌齢は学者を自任したのだ。『論語』雍也にいう「なんじ　君子の儒となれ」それならば学者にも君子　非君子さまざまにいるわけだ。孔子が衛から魯に帰ったとき、哀公が館舎に孔子を訪ね、儒のありかたを問うた。「儒有」学者にはつぎのような生きかたがあります、といって孔子は十七の儒行を列挙

したと伝え『礼記』の一章になっている。冒頭の詩が「儒有」の語ではじまる以上　この作は儒行篇を典拠とすると考えなければならぬ。その第十四にいう「儒に　上は天子に臣たらず、下は諸侯につかえず　慎静にして寛をたっとび　強毅にしてもって人にまじわり　博学にしてもって服ウを知り、文章に近づきて廉隅を砥厲し　国を分たんとすといえども錙銖のごとくにするあり。臣たらず仕えず、その規為かくのごとき者あり」文章は学術ある人　廉隅は節操　錙銖ははした金、規為は自律というほどの意。唐の孔穎達の疏には、天子に臣たらざる例に伯夷　叔斉を、諸侯に仕えぬ例に長沮　桀溺をあげる。冒頭の学術は多岐にわたるが　五経のうちでは殊に『易』を嗜読したらしい。その蠱・上九にいう「王侯につかえず、その事を高尚にす」こころざしの剛毅な隠者は、権力に奉仕せず、高潔な生きかたを貴くというのだ。王侯を軽んずる儒といえよう。

『晋書』謝尚伝に「細行を脱略し流俗のことをなさず」という。「脱略蔑世務」はこれにより、脱略は気ままにして束縛をうけないこと。謝氏は晋　宋両朝を通じて王氏とならぶ大貴族。尚は謝霊運の曽祖父の従兄にあたり　学問　芸術に秀で　銀西将軍となったが　世間の儀礼にならわぬところがあった。「世説新語」任誕には、かれが父の葬儀の帰り、友人に誘われ宴席につらなり、酒がまわってから　喪服のままだったことに気づいた話がのっている。注には　宋の明帝の『文章志』をひいて　父ではなく兄の葬儀だったとするが、いずれ脱略に違いなく、明帝の批評によれば軽卒だった。

当世の務とは、今の世の政治である。『史記』秦始皇紀の李斯のことばにいう「いま諸生は今を師とせずして古を学び　もって当世を非として黔首を惑乱す。……古をもって今を非とする者

は族せん」諸生は儒・黔首は人民　族は一族を死刑にすること。儒者どもは昔の例をひいて今の政治の悪口ばかり言うからけしからん、というのである。それでは儒はつねに現在の政治を非難するのか。『史記』の著者司馬遷は論賛していう「野諺にいわく　前事をこれ忘れざるは後事の師なりと。ここをもって君子は国をおさむるには、これを上古に観じ、これを当世に験し　まじうるに人事をもってし、盛衰の理を察し、権勢の宜を審かにし、去就は序あり　変化は時あり、ゆえに曠日長久にして社稷は安し」当世の事は君子のわざとするのだ。この君子は儒ではなく、権力を執って天下に臨むひと、すなわち王侯だろう。だが、王侯が当世に験するためには上古を観なければならず、上古のことは儒に聞くほかはない。また『礼記』には「儒に　今人とともに居りて古人とともにかんがえ、今世にこれを行いて後世もって楷となすあり」という。それなら儒もまた上古にかんがえるだけでなく　これを当世に行わねばならぬ。ただ王侯が「古をもって今を非とする者は族せん」といい、これを政治の中心とするとき、それでもやはり儒は当世の務に精勤すべきか。ここに、さまざまに儒行のわかれゆく岐路がある。昌齢は「脱賂」をとるのだろう。けれども、諸葛亮の「出師の表」に「三たび臣を草廬のうちに顧りみ　臣にはかるに当世の事をもってしたまいき」というように、三顧して招かれたら政治の場にのり出してもよいという自負は　おそらくかれにもあった。

昌齢はもと藍渓のほとりに住んだ。それをうたうのが「本家藍渓下」である。藍渓は藍水ともいい　陝西省藍田県の東　藍田谷を源とし　西北流して灞水に入る。終南山麓の渓谷のひとつで、景観の美によって知られる。譚氏は、この句と「李浦の京にゆくに別る」104(6818)の「故園は今

灞陵の西に在り」の句によって昌齢の本籍を京兆首都長安とし、昌齢と同時のひと殷璠の『河岳英霊集』がかれを「太原」の人というのは、郡望によってそう称するのだとする。長安と藍田とは、ほぼ三〇キロメートル距たるけれども　唐人にとってはわが平安朝の都人が宇治に対するほどの感じだったろう。昌齢は　藍渓の名はこの詩以外に使っていないが、「独遊」020(6414)「灞上閑居」039(6722)「灞池に題す、二首」082(6767)083(6768)「灞上に宿る。侍御の璞弟に寄す」168(6691)に灞水を、「裴氏の山荘に宿る」010(6408)に終南をうたう。灞水は長安の東郊を流れる川　終南は南郊の山だ。長安を都とする唐の官僚が、長安とその付近の風物をうたったところで、その人を長安の人とはいえないが、昌齢の詩には　故郷に対する感情がみえる。かれが長安に久しく家居した人であることは疑いない。ただ「故園」「故郷」は、拙稿「顧況雑記」などで説いたように　わが中世の「ふるさと」にちかく、愛する人のいるところをさし　必ずしも本籍をさすわけではない。

唐人が「某地の人」と自称するとき、その某地は　本籍であることがあり、家居の処であることもあるが、しばしば郡望だった。郡望とは土地の名族というほどの意。たとえば京都の冷泉氏、鹿児島の島津氏、いま京都にかかわりのない青森の冷泉某が「わたしは京都の冷泉です」というとすれば　和歌の名家と自分とを関係ありげに見せようとするのだろう。軽薄な虚栄だが、唐代にはひろく行われ　儒学の正統を自任した韓愈さえこの弊をまぬかれぬ。昌齢にとっての「太原」もそれだと　諱氏はいう。

昌齢は　現存作品では、みずからどこの人ともいっていない。けれども、のちに述べる「駕は

河東に幸す」071(6745)を玩味すれば、かれの祖先が太原の人であり　そのことにかれが大きな意義を見出していたろうことが感ぜられる。殷璠が「太原の王昌齢」とよんだのは根拠あってのことにちがいない。

このほか『新唐書』の伝に　王昌齢を、江寧の人とする。その誤りであることは既に説がある。ただ　そこでかれが「郷里に還り（あるいは、還らんとし）刺史の閭丘曉に殺された」という郷里がどこであるかを検討する必要がある。これについては後に触れるだろう。

なお　開元十七年（七二九）ごろ、王維が藍田県の輞川に住みはじめ　その前後に孟浩然が長安に遊んでいる。昌齢がかれらと交際しはじめたのは、この時ではないだろうか。

さて　藍渓に家居した昌齢が「非為漁弋故」漁弋の為の故にあらず　というのは『晋書』謝安伝をふまえる。安は　さきの謝尚の従弟で尚書左僕射太保にまでなったが、若いころ官界に出ることを勧められてもことわり「出でては則ち山水に漁弋し　入りては則ち吉詠属文し」た。昌齢の句は、庶民の漁夫　猟師のような身すぎ世すぎのためではなかったが、大貴族謝安のような悠悠自適の生活でもなかったと、二重の意味をこめているのだろう。

晴耕雨読は古来文人が理想とした。諸葛亮も「臣はもと布衣、南陽に躬ら耕せり」といった。昌齢はこれに倣ったのだろう。だが「無何困躬耕」いくばくもなくして躬耕に困しむ。食うに追われる庶民ならやむをえず　すでに産をたくわえた貴族なら楽しく、従うであろう躬耕も、中小地主出身の知識人に続けられるはずがなく、たちまち破綻困窮する。

困窮について『易』に説がある。困にいう「大人は吉にして咎なし、言うことあれども信ぜら

「弋」を集は「戈」とするが、いま唐詩紀事・河岳英霊集・全唐詩に従う。弋はあやまりである。

れず」君子が小人に圧迫されることを困という。そのとき理想をかかげて道を守ろうとすれば必ず窮する。言うことが世に信ぜられないからだ。象にいう「沢に水なきは困なり　君子もって命を致し志を遂ぐ」沢に水が涸れるような困窮のなかで、生命を捨てても理想を達成しようとする。それが君子の道だ。象にいう「口を尚べば窮す」沈黙を貴くことが最上の方法だろう。だがそれは顔回や原憲のような大人にのみ可能であって、凡わずにはおれぬ詩人には腹ふくるるわざ。初六にいう「臀(しり)は株木に困しむ　幽谷に入る、三歳まで覿ず」とがった木の切り株に坐らされた血気さかんな青年は、居もじもじ落ちついておれぬ。だが深い谷に入りこんだようなもので　出ようと努めても長く日の目を見ることはあるまい。六三にいう「石に困しみ蒺藜に拠る、その宮に入ってその妻を見ず」進もうとすれば藜石が立ちはだかり、退こうとすれば荊棘(いばら)が身を刺す。やむなく家にもどれば、心をゆだねてその胸に休ろうべき妻の姿が見えぬ。

当時、あるいは、昌齢には実際そのようなことがあったのかもしれぬ。「閨怨」に

閨中少婦不曾愁　部屋のうちなる若き妻かつて愁えず
春日凝妝上翠楼　春の日に粧いこらし楼に上りぬ
忽見陌頭楊柳色　ふと見しは街かどの柳のみどり
悔教夫壻覓封侯　国守(くにもり)にならんと夫の旅立つを留めざりにき、

この少婦の夫の心理を分析すれば、おそらく、困窮時代の昌齢の日々の鬱屈がみえてくるはず

だ。昌齢の妻は、この詩の女の幼い無智もなく、せめて夫の旅立つ日まで待とうとする余裕も持たなかったのだろうか。

昌齢の躬耕は「小人、上にあり」という観察を根拠としたかもしれぬが、一書生の判断にすぎず、世は唐中興をうたわれた開元の盛世で、天子玄宗は賢臣とともに政治にはげんでいた。上六にいう「悔ゆることあれば、征きて吉なり」まだおのれが「自らを高尚にす」べき大人でないことを反省して悔い、つつましく人と同じ労苦の中にはいってゆけば、あるいは窮も変じて吉となるだろうか。昌齢は長い旅路に出ることを決意する。それが「且欲馳永路」まさに永路に馳せんと欲す、である。このときかれの胸に、竹林の七賢のひとり阮籍の「詠懐詩」のつぎの一章が去来していたことであろう。

独坐空堂上　　獨坐空堂上
誰かともに歓ぶべき者ぞ　　誰可與歡者
門を出でて永路に臨み　　出門臨永路
行く車馬を見ず　　不見行車馬
高きに登って九州を望むに　　登高望九州
悠悠として曠野は分る　　悠悠分曠野
孤なる鳥は西北に飛び　　孤鳥西北飛
むれを離れし獣は東南に下る　　離羣東南下
日暮れて親友を思い　　日暮思親友

暗言もって自ら写す　　暗言用自寫

「儒に博く学んで窮せず、篤く行いて倦まず　幽居して淫ならず　上に通じて困まざるあり」とは『礼記』の語・そのような儒行を願ったであろう昌黎には、さびしさにたへたる人もあれな、と庵をならべる友があった。それが「幽居與君近」幽居は君と近し　の君であり・その君が陶大である。

陶氏も同じように困窮し、前後して谷を出る。「出谷同所鶯」谷を出でて鶯するところを同じくす、である。『詩』小雅・伐木に「幽谷より出で　喬木に遷る」とうたう・この意を後世には官吏試験に及第することにたとえる。「鶯」を『説文』は「乱れ馳するなり」と解く。「出谷」とあわせて考えると　この句は、二人が前後して官途についたことを指す。

陶　翰

陶大がどんな人かは、さきにいったように、詳かでない。しかし推測の道がないわけではない。集に見える人の中に、あるいは同時代の文人の中に、相当する者をさがしてみるのだ・集には別に二回「陶」姓の人があらわれる。一は「陶副使が南海に帰るに別る」

南越歸人夢海樓　　南越に帰る人は海楼を夢に見る
廣陵新月海亭秋　　広陵では新月がでて海亭は秋

寶刀留贈長相憶　　お贈りくださった宝刀に末長くあなたを偲ぼう
當取戈船萬户侯　　軍船でめざましい功をたて万户侯におなりなさい　　129(6824)

南越は、百越ともいい、越王句踐の子孫が楚に敗れ　分散して嶺南の各地に拠ったものをさすといわれるが、それが古代の揚州に属するところから、揚州の異名としても使われるらしい。『越絶書』巻八に句踐は呉を討とうとして、観台を築き、東海を望み、戈船三百艘をそなえた　という。初句の「海楼」には観台の心象を重ねているのであろう。広陵は揚州（江蘇省）である。

「漢書」によれば、南越王の宰相の呂嘉が反乱したとき　越人で漢に帰順した帰義越侯嚴が戈船将軍となり　零陵に出て離水を下り大功をたてた。戈船は戦船だ。「南越帰人」や「戈船」の語はこれらの故事によるものと察せられる。万户侯は、百万石の大大名というほどの意。『史記』李広伝に、漢の文帝が広の不遇をあわれんで、君が高帝の時の人なら万户侯になったろうに、といった。

二は「陶副使に寄す」

聞道將軍破海門　　聞けば　将軍は海門を攻め破られた由
如何遠謫渡湘沅　　それをどうして遠く追放され湘・沅の川を渡られるのか
春來明主封西岳　　春になり天子が西岳華山で封禅をなさるとき
自有還君紫綬恩　　君に将軍のしるしの紫綬をおかえ　しになるでしょう　　160(6808)

海門は揚州管下の大江河口のまちをさすのであろう。封禪は高山に壇を築いて天を祭ること。『唐会要』によれば開元十八年と二十三年と天宝九載とにそれぞれ泰山で封禪をしようとの議が出たが いずれも実行されなかったらしい。

二首のいう「陶副使」はたぶん同一人だろう。副使は、節度使・監察使などの副官をさす。一は 二にいう海門討伐のための帰任を送るのらしく、二は 討伐に功を立てながら、何の咎をこうむって、湖南の僻地に流されるのを慰めている。そこまではわかっても、副使の名も経歴も不明である。ただ、副使は武官で 陶大は文官らしいから 別人だろうという気がする。

昌齢と同時の文人に、陶翰というひとがいる。『唐才子伝』によれば 潤州の人で 開元十八年に進士に及第し 次の年に博学宏詞科に合格した。同時合格者には鄭昉がいる。官は礼部員外郎に至った。

潤州は、江蘇省鎮江県で、昌齢が丞となった江寧県から約七〇キロメートル東北の大江に臨むまち。翰をそこの人というのは本籍なのか、郡望なのか。「晩に伊闕に出で河南裴(中)丞に寄す」る詩(6948)に「家はもと渭水の西」とうたう。渭水は長安の西からその郊外を東北流する河だから、翰もまた首都の近郊に家居したのだ。進士は、開元十五年及第の昌齢が先立つが、博学宏詞は、十九年ならば、ふたりはまさに同年の合格者である。ただ 昌齢が博学宏詞の試験で採用された答案は「公孫宏開東閣賦」翰のは「冰壺賦」だ。同年ならば同題ではなかったろうか。また『唐才子伝』が 翰の同年の人として鄭昉をあげながら昌齢に触れないのもおかしい。他の詩人の記事についても『唐才子伝』は往々あやまるから、そこに記された年の一致によって昌齢と翰

が同年だったとは断定できない。しかし相前後する博学宏詞だったことには間違いない。

『全唐文』巻三百三十四に翰の文二十首を收める。「孟大の蜀に入るを送る序」の孟大は孟浩然だから、二人は共通の友人をもったわけだ。「王大の拔萃に第せずして睢陽に帰る序」の王大は昌齢ではないかと思われる。

「全唐詩」には詩十七首。さきに引いた作に「微言は莊（子）と易を祖とす」というから、その思想は昌齢と同じ方向をさす。ここで注目したいのは「太華を望む。盧司倉に贈る」である。

官吏となって西華に到り　　作吏到西華
そこで三峯の壮なすがたを観る　　乃觀三峯壯
宇宙根元の気の中に削成し　　削成元氣中
天河の上に傑出する　　傑出天河上
飛動の色あるがごとく　　如有飛動色
青冥の状も知られぬ　　不知青冥狀
黄河の神はどこにおいでかわからぬが　　巨靈安在哉
そのみわざの跡はなお望み見ることができる　　厥迹猶可望
さてここでおのれの義務を顧りみれば　　方此顧行役
仙人に姿をかえるわけにもゆかぬ　　未由飭仙裝
葱蘢とあかるい星壇をこころにきざみ　　葱蘢記星壇
明滅する雲わく嶂を数える　　明滅數雲嶂

良友重真契　　良友重真契
宿心所微尚　　宿心所微尚
敢投歸山吟　　敢投歸山吟
露徑一相訪　　露徑一相訪　　(6945)

良き友は真情を示された
かねてひそかにありがたく思っていたのだ
どうかこの「山に帰るうた」をうけとって下さい
いつか露たつ道にあなたをお訪ねするしるしです

この詩にはいくつか異文があり、ことに初句の「作吏」を「行吏」とし第九句の「行役」を「行旅」とする本があり、それが断定をためらわせるが、いまは推測をしるすのである。

初句の西華は、西岳華山をさすのであろうが、華山の西とも読めないわけではない。華山の西ならば華州であり、吏となってそこに到る、とは官吏となって華州に勤務することではないのか。陶大のつとめる鄭県が華州の政庁所在地であることはさきに記した。「作吏」が「行吏」ならば使者としてそこに行ったということになろうが、その場合でも滞在が長期にわたることもあったようで　いずれにしても、勤務あるいは滞在の間の起居は公館でなされたろう。それならば、陶大が陶翰である可能性が出てくる。

右は外部的な徴証だが　内面的にも推察すべきものがある。翰の「慈龍記星壇　明滅数雲嶂」は昌齢の「華山を過ぐ」の、

雲起太華山　　雲は起こる　太華山
雲山互明滅　　雲と山と互に明滅す

と極めて相近い。同じことばが使われているというだけでなく、その好尚において親密で、両者の魂の互いに明滅するのが、ふたりの句に感ぜられるではないか。翰の「秋山夕興」の

006(6728)

山月は松篠の下　　山月松篠下
月明らかにして山景鮮かなり　　月明山景鮮　　(6956)

は　昌齢の「山中にて龍十に別る」の

幽娟松篠徑　　幽娟なる松篠の径
月出葉蟬鳴　　月出でて葉蟬鳴く　　029(6697)

と近似する。そうしてこの句はただちに常建の「王昌齢の隠居に宿る」の、

松際に微月あらわる　　松際露微月
清光は君の為なるがごとし　　清光猶為君　　(6856)

を想い起こさせ、李嶷の「淮南の秋夜、周侗に呈す」の、

風は乱す池上の萍　　風亂池上萍
露は光る竹間の月　　露光竹間月　　(6915)

もまた同じ方向に心のはたらく人の凝視が見出した表現だろうという気がする。ふたりは昌齢と同年の進士で　建は明らかに　嶷はたぶん　かれの友人だった。

今日の芸術のように個性をきわだたせることを第一義とする風潮のなかでは、友人の作との類似も意識して避けるだろうが　唐のころは、人の語句を踏襲することはその人に対する敬愛のあらわれと見なされたらしく、またすぐれた表現は典型として直ちにひとに学ばれたようである。数えるいとまもないが一つ例をあげると、岑参が見出して頻りに繰りかえした「飛鳥の外」の語を、その友の高適が「広陵の棲霊寺塔に登る」(10289)で「独立す飛鳥の外」と使っている。

これらの諸条件と「谷を出でて鶯はするところを同じくす」の句とをつき合わせると、陶大を陶翰と見ることにさほど不都合はないのでないか。翰は「潤州の人」であった。潤州は、さきの陶副使の帰っていった広陵とは　大江の南北に約二〇キロメートル距たるだけだ。翰と副使の間にも何か関わりがありそうだが、いまのわたしはこれ以上追究することができない。

太　原

昌齢の詩にかえろう。「昨日辭石門」昨日石門を辞す。石門は『読史方輿紀要』陝西・藍田県に「石門谷、県の西南五十里、唐時に石門鎮あり」というものであろう。すなわち昌齢家居の地だ。

かれがそこを去ってから官職に就くまでに五年経過している。振りかえったときには昨日のことのようにしか思えなくても、埋められた時間には、さまざまの変化があった。それが「五年愛秋露」五年秋露変ず　である。『初学記』に「大戴礼にいう。露は陰陽の気なり。それ陰気まされば則ち凝って霜雪となり、陽気まされば則ち散じて雨露となると。瑞応図にいう。露色の濃き、を甘露となす。王者　徳恵を施せば、則ち甘露その草木に降ると」露が王者の徳恵ならば、変じて霜雪となるとは、天子の恩恵がわが身に及ばぬことであろう。昌齢が進士に及第し、汜水の尉となったのは、開元十五年。その五年前は十一年。開元十一年に藍溪を去ったとすると、それはちょうど、玄宗が河東（晉）に行幸し、昌齢が「駕は河東に幸す」を作った年に一致する。駕とは

天子の車である。これはかれの詩で作時を推定しうる最も早いものに属する。

『旧唐書』玄宗紀　開元十一年の記事によれば　玄宗は、春正月十四日、唐開国の地である河東の并州・潞州に行幸し　土地の父老を召して宴会し、玄宗のかつて住んだ家を飛龍宮と名づけた。二十五日、并州を太原府と改め、官吏の待遇を首都なみにし、人民・困窮者　開国従軍の家にそれぞれ一年　二年　五年の租税を免除し、当時の功臣と皇族の子孫で文武の官につきうる才能をもちながら未だ官職に就かぬ者の有無を　府県に調査報告させ、みずから「起義堂頌」をつくって揮毫し、これを石に刻んで太原府の南街に立て創業を紀念した。二月十二日、晉州にやどり　十六日、汾陰で后土を祠り、三月五日、長安に帰還した。なお、玄宗は青年のころ　衛尉少卿で潞州別駕を兼ねたことがあり、その年　州境に黄竜があらわれ白日昇天したという。

晉水千廛合　晉水に千廛をつらね
汾橋萬國從　汾橋に万国つどう
開國天業盛　唐ひらき天業さかえ
入沛聖恩濃　沛に入り聖恩ふかし
下輦回三象　三象の楽に下りたち
題碑任六龍　碑に題し竜飛したもう
睿明懸日月　日と月と清くさやけく
千歳此時逢　千歳にこの御代に逢う

071(6745)

「駕は河東に幸す」である。晋　汾は太原の川の名。盧は、わが頼田王が「うちのみやこのかりいほ」と歌ったかりいほにあたり行在の仮設の建物をさすのであろう。「沛に入る」とは　漢の高祖が天子となって十二年　ふるさとの沛にかえり、「父老」すなわちその土地の長老とその子弟を召して宴し、みずから築という絃楽器をならし「大風起こって雲飛揚す・威海内に加わって故郷に帰る。いずくんぞ猛士を得て四方を守らん」とうたった故事をさす。隋にそむいて兵を起こし唐を開いたのは　唐の高祖とその子の太宗らであって玄宗ではない。行幸は祖先の創業を紀念するためだった。けれども則天武后の革命によって傾いた唐室を完全に復興したのは、玄宗だったといってよい。その人が、開国の地であり、青年時代の任地に帰って「父老」を宴したのは　みずからを漢の高祖になぞらえる心がなかったとはいえぬ。三象は周の武王あるいは周公の音楽だといわれる。六竜は『易』乾に「時に六竜に乗じ以て天に御す」といい　天子の車駕をさす。

明らかに玄宗聖徳讃歌である。冒頭はこれを、なぜ故郷を去った年に作ったか・かれが「太原の人」で開国功臣の子孫ならば「文武の官につきうる才能の保持者」として抜擢される資格があることになる。出仕のためには最好の機会だった。躬耕をやめる決断は、あるいはこの行幸によって促され、詩は　天子に献じてその知遇を得るための作だったろうか。

かれの讃歌は受容されなかった。それが「雲龍未相感」雲と竜と未だ相感ぜず、であろう。『易』乾　上九に「飛竜　天にあり　大人を見るによろしと、何の謂ぞや。子いわく、同声は相応じ、同気は相求む　水は湿れるに流れ、火は燥けるに就く、雲は竜に従い　風は虎に従う、聖人おこ

って万物あらわる、と」それなら昌齢の句は、竜を玄宗に　雲をおのれに当てているのであろう。咸・象に「咸は感なり。柔は上にして　剛は下　二気感応してもって相くみす。止まってよろこぶ」上に立つ人が柔和で、剛直なわたしを受け容れてくれれば、国にとっても喜ぶべき状況をもたらし得るであろうに「未だ相感ぜず」というのである。

昌齢は剛の人だったろうが、このときの玄宗が柔でなかったとはいえぬ。ただ、玄宗は美に対する鑑識眼が高く　その朝廷には文筆の士が雲集したから　この程度の諷歌には感服しようがなかっただろう。集にはこの作の前に「駕は長安を出でたもう」がある。

聖徳は千古を超え　　聖徳超千古
皇風は九囲を扇げり　　皇風扇九圍
天回って万象出で　　天回萬象出
駕動いて六竜飛ぶ　　駕動六龍飛
淑気は黄道に来たり　　淑氣來黃道
祥雲は紫微を覆いぬ　　祥雲覆紫微
太平にして亳従多く　　太平多亳從
文物に光輝あるかな　　文物有光輝

典雅で、秀作とはいえなくても　頌歌の体はととのえている。玄宗も、この方ならば採ったかもしれぬ。あいにく、これは武后朝の宮廷詩人宋之問の作として知られ　昌齢の集には誤ってはいったものと思われる。「駕は河東に幸す」は、上聞に達するまでもなく、太原府の役人の手で

070(6744)

握りつぶされたに違いない。

「寒食即事」は、たぶんこの年、玄宗が長安に還幸したころ、なお太原に滞留していての作であろう。

晉陽寒食地　晉陽は寒食の地
風俗舊來傳　風俗　旧来伝う
雨滅龍蛇火　雨は滅す竜蛇の火
春生鴻雁天　春は生ず鴻雁の天
泣多流水漲　泣多くして流水漲り
歌發舞雲旋　歌発して舞雲旋る
西見之推廟　西に之推の廟を見るに
空爲人所憐　空しく人に憐れまる

066(6757)

晉陽は太原。寒食は　そこに始まり、後ひろく中国各地に行われた節句で、冬至ののち一百五日。日については別の説もある。事の起こりは『史記』晉世家などに見える次の話にもとづく。

春秋時代　B.C六五五年晉の献公は驪姫の讒言を信じ、せつぎの子の申生を殺し驪姫の子の奚斉をせつぎとした。申生の弟の重耳と夷吾は出奔した。B.C六五一年　献公が死ぬと　夷吾は斉の後おしで晉に帰国し位についた。恵公である。B.C六四四年、重耳は斉に出奔した。B.C六

三七年　恵公が死に　公子の圉があとをついだ。懐公である。その翌年、重耳は秦の後おしで帰国し、懐公を殺して位についた。文公である。

文公の長い亡命生活に従った者のうち介之推は特に主人思いで、自分の股の肉をさいて文公の飢えを救ったこともある。帰国できたとき、文公は従者にそれぞれ恩賞したが　之推を忘れていた。之推は「竜蛇の歌」を作って隠れた。歌にいう「竜の天に上らんと欲するや、五蛇あり輔けをなせり。竜すでに雲に升り、四蛇おのおのその宇に入りしに、一蛇ひとり怨むらくは終に処る所を見ず」文公はこれを聞いてはっと気づき、呼びよせたが出てこない。火をたいて煙でいぶしたが　やはり出てこない。見れば、之推は木を抱いて死んでいた。人々は哀れに思い　この日がくると、火を断って三日間は冷食する。

竜蛇の歌の怨みの火も雨にうち消され　鴻雁の去った天に春がくる。起原はともかく　唐代にはすでにこの節句は遊楽の日となっていて、人は、ぶらんこ・蹴まり、闘鶏などをたのしむ・ことに開元十一年には行幸の余慶に賑ったろう。それが「歌発して舞雲旋る」である。その中で昌齢のみひとり西のかた之推の廟を見つめ　竜蛇の歌を思うて泣き、ために流水も深るというのはかれもまた之推の境涯に近いという主観によるのだろう。そうしてこの主観は、さきに推察したように、かれの祖先が唐の創業をたすけたであろう事情に支えられているのではないか。

蕭條郡城閉　蕭条として郡城閉し
旅館空寒烟　旅館に寒烟空し

秋月對愁客　　秋月は愁客に対し
山鐘搖暮天　　山鐘は暮天に揺らげり
新知偶相訪　　新知たまたま相訪わる
斗酒情依然　　斗酒　情　依然
一宿阻長會　　一宿　長会を阻つ
清風徒滿川　　清風徒らに川に満てり

063(6747)

「潞府の客亭　崔鳳童に寄す」である。潞府は潞州でいまの山西省長治県。その地と玄宗とのかかわりはさきにのべた。冒頭の祖先もまたここにゆかりをもち、それをたのみにかれもやってきたのであろう。「斗酒情依然」は酒をくみかわして語るうちに共感共鳴すること多く、旧知の人のようにしたわしくなった、というほどの意であろう。「一宿阻長會」を『文苑英華』は「一宵阻良會」とする。その方がわかりやすいようだが、いずれにしても、せっかく意気投合したその人とただ一夜語りあったのみで別れなければならないのが残念だというほどの意であろう。崔鳳童という人についてはわたしに知識がないが、玄宗の第十女の高都公主が崔恵童なる人と結婚している。恵童は清河（河北省）の名家として知られた崔氏の人で　父庭玉は右驍衛将軍蔓州刺史、兄孝童は監察御史濮州刺史、嗣童は陵州刺史である、と『新唐書』世系表にしるす。同表には鳳童の名は見えぬが　恵童の兄弟かいとこの一人ではないだろうか。この詩がわたしの推測するようにこの年の作とすれば　失意のうちにあるものの人恋しさ、察すべしである。

ひとたび郷関を出たならば、失敗したからといって、のめのめ引き返すわけにはゆかぬ。帰れぬとなれば、人を訪ねて就職の依頼にさげたくない頭もさげねばならぬ。「干謁亦已憂」干謁も亦すでに憂々す。さきの「潞府客亭」には「新知たまたま相訪わる」というけれども、これも昌齢が就職依頼の目的でさきに訪問し　不在か何かのために会えず　鳳童が外出のついでに答礼に昌齢の旅館に立ち寄ったのを、昌齢が引きとめて盃を交わしたのかもしれぬ。昌齢の用件は、鳳童が婉曲にことわったのではないか。それが「清風徒らに川に満てり」に響いているように感ぜられる。これは臆測である。だが『全唐文』巻三百三十一に見える「李侍郎に上る書」は明らかにかれのした「干謁」の一つ、中でも主なものであったろう。

……昌齢は貪賤に久し。ここをもって多く危苦の事を知る。まことに長吟悲歌も投足するところ無きことあらば　天工あるいは闕けんも何りてかこれを補わん。いやしくも人あり国あらば昌齢請う、袂を攘って先駆して国士となり、もって棼糸にこれ務め、最急をこれ治むるは、まことに心に甘んずるところ。昌齢あに身を青山に置き、俯して白水を飲み　道義に飽いて然る後に王公大人に謁し、もって大遇を希うを解せざらんや。力養給せざるを思うごとに、則ちおぼえず独坐流涕し、菽を啜って米を負う。ただ明公、深くこれを念いたまえ。……

前半は、人民のため国家のためならば、煩わしく忙しい仕事も喜こんでやりましょう、という

ほどの意。後半は　隠棲しながらお上の招請を待つほうが有利なことは知っているが、親に不自由させたくないので就職を急ぐのです、お察しください、と同情を乞うているのだ。

李侍郎とは　開元十二年六月に吏部侍郎となり十三年春他に転じた李元紘である。京兆万年の人。もとの姓は丙氏だったが、曾祖の祭が唐の創業に功があり、天子の姓の李氏を下賜された。吏部侍郎は文官の選抜採用に大きな権限をもつ地位だ。元紘は謹厚清倹の人として知られた。剛直を自負する昌齢は、その人柄に頼むところがあったのだろう。願いは、しかし元紘の容れるところとならなかった。これが、かれのその後につづく放浪の直接の動機であろう。

ここでいったん、鄭県での作から離れ、しばらくかれの足どりを追ってみよう。

辺塞

開元十二年、秋の終りに近いころ、二十七歳の昌齢は河隴に旅したようである。河隴は、河西と隴右との簡称。河西はいまの甘粛省で、いわゆるシルクロードの東部。隴右は青海省。漢の武帝のころから中国の領土にはいったが　住民の多くは漢民でなく　しばしば他国の侵攻にさらされた。唐の版図はさらに西、天山山脈の南北にまでひろがったが、そこをも含めて、植民地であり　別のことばでいえば、辺塞　だった。

唐代の官吏は、試験で選抜し、有為の人材をひろく民間からとる建前だった。けれども、初盛唐における実際は、一種の貴族政治で、家柄がものをいった。試験はだいたい毎年おこなわれ

たが、及第者は全国の志望者の何百分の一にすぎぬ。及第者もまた官職につくとは限らなかった。当時の知識人で、選ばれて正式の官吏となる者以外の生活法は　大きくわけて二つあった。一は農耕　医薬　易占　祈禱などに従事し、二は家庭教師　筆耕　地方政庁や軍閥の顧問や書記となる。一は隠者に類し、そのうちのいくらかは仏僧・道士となった。二は正式の官吏をめざす待機者だ。一の隠棲が必ずしも厭世を動機とし目的とするとは限らず、皇帝の気まぐれや信仰から側近に招かれる例があり、中には宰相に進む者さえあった。昌齢の弟の璞がまさにそれである。二の待機がつねに官吏となることを約束されているわけではなく　なっても高官に達するわけではない。昌齢がそれである。

昌齢は隠者の列から離れ　待機者の数に入り、内地の就職に見切りをつけて　植民地に行ったのであろう。中央を遠ざかるにつれて、官吏として上進する軌道からはずれてゆくが、格式ばったことはより少く　経済的にはより豊かであるのが普通で、戦争や動乱が起こり、そこで花々しい功績をあげれば　一躍、高官に任命されることも、稀にはあった。のちに宰相に上る牛仙客安西四鎮節度使となる封常清が、その著しい例である。稀なその例が血気さかんな青年たちの心をとらえた。「少年行」にいう。

西陵俠少年　　西陵の俠少年
送客短長亭　　客を送る短長亭
青槐夾兩路　　青槐は両路を夾み

白馬如流星
聞說羽書急
單于寇井陘
氣高輕赴難
惟願燕山銘

白馬は流星の如し
聞くならく　羽書　急に
單于（ぜんう）　井陘を寇（あだ）す　と
気高ぶりて難に赴くを軽んじ
ただ願えり　燕山の銘

025(66777)

西陵は三国魏の都であった鄴城をさし　いまの河南省臨漳県。その地の人は昔から武勇によって知られた。短長亭は　短亭と長亭。国道の五里ごとにおいた駅を短亭といい、十里ごとにおいた駅を長亭といった。「送客短長亭」を『河岳英霊集』は「客過短長亭」とし『文苑英華』は「送客過長亭」とする。槐はエンジュ、柳とともに唐代の街路樹の主なもの。「両路」は誤りで「大路」とすべきだという説があり、それがよいだろう。羽書は動員令。単于は匈奴の天子。井陘は河北の地名。後漢の竇憲が死罪をあがなうため外蒙古の燕然山に匈奴を討ち、成功を山上の石に刻んだのが燕山の銘。「惟願」を『河岳英霊集』は「誰願」とし『文苑英華』は「誰願」とする。それなら、進んで国難に赴くのみで　功績や名声は問題でない、ということになる。ともあれ、由来いちかばちかの好機をねらって辺塞をめざす侠少年や悪少年が多かった。昌黎の友李頎の「塞下曲」にもまたいう。

少年　騎射を学び　　少年學騎射
勇は并州の児に冠たり　　勇冠并州兒

ただ愛す　身をぬきんずることの早く　　直愛出身早
沙漠のほとりに辺功あらんことを　　邊功沙漠垂
戎鞭を腰下に挿し　　戎鞭腰下挿
羌笛を雪中に吹く　　羌笛雪中吹
……　……　　（6369）

だが　高ぶった気持はいつまで持続するか。

倦此山路長　　この山路の長きに倦み
停驂問賓御　　驂を停めて賓と御とに問う
林巒信回惑　　林巒　まことに　回惑
白日落何處　　白日　何れの処に落つるや
徙倚望長風　　徙倚いてはるけき風を望めば
滔滔引歸慮　　滔滔として帰りたき慮いを引く
微雨隨雲收　　微雨は雲に随って収まり
濛濛傍山去　　濛濛として山にそいて去る
西望有邊邑　　西を望めば辺邑あり
北走盡亭戍　　北に走るは尽く亭戍
涇水橫白烟　　涇水に白烟はびこり

州城隠寒樹　　州城は寒樹に隠る
所嗟異風俗　　嗟くところは風俗ことなりて
已自少情趣　　すでにおのずから情趣の少きこと
豈伊懐懐土　　豈にこれ土を恋い懐うならんや
解物且欣遇　　物を解して且つ遇うに欣ぶ

048(6732)

「山行して涇州に入る」である。涇州は甘粛省涇川県。長安の東北に約一八〇キロメートル。陝西省を出たばかりである。長安　洛陽の間はほぼ三〇〇キロメートル。その道をさほど遠いと感じなかった唐の人である旨歴が　西にむかってその半ばを少し過ぎて、すでに倦んでいる「長さ」は、地理の山路のそれではなく、心理の刻む道程としかいいようがない。行き合う人には、わざわざ馬をとめ、車をとめて、その主に聞き、御者に問う。「林密まことに回惑」と歌うが、うねうねくねって惑わしいのは　かれの遅疑する感情であって林密ではない。長風を望み、西望し　滔滔、滚滚として、かれの心はただ来た方にのみ引かれて、行く方には向わない。しかも、「豈にこれ土を恋い懐うならんや」は笑止で、ほとんど論理をなさぬ。結びの句はわかりにくい。『文苑英華』の注に「集に觸目忻所遇に作る」という。それならば「目に触れて遇うところを忻ぶ」情趣の少い風俗でも　見てゆくうちに新奇なものに接する喜びがないではない、というほどの意であろう。前途に対する期待が、見馴れぬ風物に触れて崩れようとするのを、自ら慰さめ励ますのだ。わたしはこの詩を愛する。未知の世界にむかって進む人は、つねに躊躇逡巡の中でみ

ずからを動まさなければならないものだ。そうしてそれこそが人間の生命と名づけられるもののすがたなのではないか。生命のすがたを描くことをも思想とよびうるならば、この作を思想詩とよんでもさしつかえないと、わたしは思う。

白花原頭望京師　　白花原頭に京師を望めば
黄河水流無盡時　　黄河　水流れて　尽くる時なし
窮秋曠野行人絶　　おわらんとする秋の　曠野に　行く人たゆ
馬首東來知是誰　　馬首を東にして来たるは　これ誰なるかを知らん

098(6845)

「出塞行」である。この詩を『国秀集』は李頎の作とし題を「白花原」とする。また「白花」を「百花」とし「白草」とする本があり、他の文字にも異同がある。しかしこれは冒頭の詩とみるのがよいように、感ぜられる。白花は不詳。白草ならば駱駝刺とよばれ西域の到る処で見る牧草だが　固原県あたりに白草原とよぶ地があったとする説もある。それならば辺塞とはいっても　まだ唐の内地から遠くはない。しかも東に向けて来る者を見れば、長安に帰る人かと、早くも羨望する。

飲馬度秋水　　馬に飲わんとして秋の水をわたれば
水寒風似刀　　水寒くして　風　刀に似たり

平沙日未没　　平沙　日　いまだ没せず
黯黯見臨洮　　黯黯　臨洮を見る
昔日長城戰　　昔日　長城の戦い
咸言意氣高　　みな言う　意気高しと
黄塵是今古　　黄塵はこれ今古
白骨亂蓬蒿　　白骨　蓬蒿に乱る

「寒下曲」である。題を『国秀集』に「臨洮に望む」とし、その方がよいかもしれぬ。秦の始皇の三十三年 B.C二二 将軍蒙恬が匈奴を討ち、万里の長城を築いたとき、西の起点が臨洮で、東は遼東に至ったという。「平沙日いまだ没せず、黯黯　臨洮を見る」には、手をかざして遠くを見る旅人の目なざしと、日暮れてなお遠くに行かねばならぬ者のほうと吐く息が感じられる。

この詩が果してこの時に作られたかどうかはわからぬ。往路にではなく、帰路に作ったのかもしれず　あるいはずっと後年になって作ったとも考えうる。しかしわたしには、この時の作のように感ぜられ　そうして　この詩を作ったことによって　昌齢は、おのれの詩人としての資質にぶつかったのだろう、という気がする。人は自らの作ったものによって自らを見出すものであるにしても　おのれの本質を的確に具現する作品を生み出すことは　ほとんど偶然にゆだねられたにひとしい。とはいえ詩は、おのれが生れ出ようとするときには、おのれのすがたを表現するにふさわしい才能に白羽の矢を立てて、その才能を持つ人の個人としての志向や希望にかかわりな

023(6671)

く、かれをいざない駆りたてて　思いもかけぬ地をさまよわせ　焦燥や、苦痛や　悲哀の中で われにもあらず叫び出させる。あるいは、呟かせる。

『書経』の舜典に「詩は志を言う」といい『詩経』の大序に「詩は志の之く所なり」というのは正しい。ただ、その志なるものを、当の詩人の心の向うところと限るならば、それは真理の半面をしかささぬことになるであろう。自ら詩作する人ならば　おのれの作る、あるいは作った詩に強いられて本意でもないところに来てしまったと歎くことが屢々あろう。詩は自らの志を人をして言わしめ、詩はおのれの志すところへ詩人を之かしめるもの。舜典や大序のことばはたぶんそのように解すべきであろう。

昌齢はこの詩を見つけてしまったために　生涯を詩人として送らなければならなくなった。この詩は　また詩人としてのかれの生き方に対しても、方向を指示する。それがいかなる方向であるかは　この後にかれが生み出さねばならない詩が、おいおいに自ら語るであろう。もっとも剛直な詩人といっても道は紆余曲折し　聰明な人でもおのれの本質を確認するには手間をかけねばならぬ。

青海長雲暗雪山　孤城遥望玉門関
黄沙百戦穿金甲　不破楼蘭竟不還

青海の長雲　雪山に暗し
孤城より遥かに望む　玉門関
黄沙に百戦して金の甲を穿つも
楼蘭を破らずんば竟に還らじ

從軍行

147(6781)

青海はココノールともいい青海省東北の大湖、この付近は中国とチベット　あるいは蒙古諸族との　戦場となることが多かった。玉門関は漢代におかれ　敦煌の西北にあたり　西南の陽関とともに　中国から西域に通ずる重要な門戸であった。楼蘭は玉門関の西にあたり　タリム盆地のほぼ東端、塩沢すなわちロプノールに臨んだ、古代の都市国家で、一時は西域の全体に勢威を張った。漢の軍隊が占領したことがあり、のち沙漠の下に埋没した。唐代にはすでにその名の国はなかったが、みずからの時代を漢代にたぐえることを好んだ唐ひとは、楼蘭を中央アジヤの異民族の国の代名詞のように使った。

胡瓶落膊紫薄汗　　胡瓶　膊に落ふ　紫薄汗
碎葉城西秋月團　　碎葉城西　秋月　団なり
明敕星馳封寶劍　　明勅は星のごとく馳せ宝剣を封ず
辭君一夜取樓蘭　　君に辞し　一夜にして　楼蘭を取る　　從軍行　　179(6785)

初句　わかりにくいが　薄汗は胡馬の一種をさすらしい。碎葉は　安西都護の下におかれた四鎮、すなわち亀茲・于闐　疏勒・碎葉の四都督府の一つで、いまのソ連領イシック・クル湖の西北のスイ　アブだといわれる。昌齢がそこまで行ったかどうかは詳かでない。行かなかったと考えるほうが事実に近いだろう。

玉門山嶂幾千重　　玉門の山嶂　幾千重ぞ
山北山南總是烽　　山北　山南　總てこれ烽
人依遠戍須看火　　人は遠戍によって須らく火を看るべし
馬蹋深山不見蹤　　馬は深山を蹋みて蹤を見ず　　從軍行　　180(6784)

騮馬新跨白玉鞍　　騮馬　新たに跨る　白玉鞍
戰罷沙場月色寒　　戰罷んで　沙場に　月色寒し
城頭鐵鼓聲猶振　　城頭の鉄鼓　声なお振るい
匣裏金刀血未乾　　匣裏の金刀　血いまだ乾かず　　出塞　　181(6786)

騮馬は栗毛の馬、沙場は戦場　匣はさや。
これらの詩は、いかにも勇壮で、爽快ではあるけれども、その勇ましさには必ず悲しみや、苦しみが、はりついている。

烽火城西百尺樓　　烽火城西　百尺の楼
黄昏獨坐海風秋　　黄昏　独坐す　海風　秋なり
更吹羌笛關山月　　さらに羌笛を吹く　関山月
無那金閨萬里愁　　いかんともするなし　金閨　万里の愁い　　從軍行　　145(6778)

羌笛は羌族の用いる笛。関山月は、曲名と、関所の山を照す月とを、あわせいう。金閨は婦人の部屋、そこにすむ将兵の妻か恋人かをさす。第四句は、その婦人が自分のことを思っていてくれるであろうと思うと　すぐそのもとに飛んでゆきたいが、そこととこことは万里もへだたって、どうしようもない　というのである。

琵琶起舞換新聲　琵琶に起舞して　新声に換うるも
総是関山離別情　すべてこれ関山離別の情
撩亂邊愁聽不盡　辺愁を撩乱して聴き尽さず
高高秋月照長城　高高たる秋月　長城を照す

従軍行　145(6779)

離別は辺塞にだけあるのではない。剛毅な心ならば、そう悟って忍耐するだろうか。

向晩横吹悲　晩れなんとして横吹は悲しみ
風動馬嘶合　風どよもして馬嘶と合う
前驅引旗節　前駆は旗節をなびかせ
千里陣雲匝　千里　陣雲　めぐる
單于下陰山　単于　陰山を下り
沙礫空颯颯　沙礫　むなしく　颯颯

封侯取一戰　　封侯を一戦に取らば
豈復念閨閤　　あに　また　閨閤を念わんや　　變行路難　　003(6669)

閨閤はさきの金閨と同じ。「あに念わんや」とは、念わずにはおられないからこそ、念うまいと自らに言い聞かせているのであり　聞きわけのないおのれの心をなだめすかす言いわけに　戦いに勝って大名になりさえすればと　甘い仮定を、それがもう其処にあるかのように、突きつけているのである。

だがもし本気でそう思っているとすれば、剛毅かもしれぬが　こんな将軍の功の成ったときあとに残るのは、枯れた万骨だけではないか。

戦いはまた、勝利に終るとはかぎらぬ。昌齢の友常建の「塞下曲」にいう。

北海の陰風は地をどよもして来たる　　北海陰風動地來
明君の祠上に龍堆を望む　　明君祠上望龍堆
髑髏は皆これ長城の卒　　髑髏皆是長城卒
日暮の沙場に飛びて灰となる　　日暮沙場飛作灰

また　　(6905)

竜闘雌雄勢すでに分かる　　龍鬬雌雄勢已分
山崩れ鬼哭いて将軍を恨む　　山崩鬼哭恨將軍
黄河直北　千余里　　黄河直北千餘里

寃氣蒼茫として黒雲となる

おなじく建の「塞下」にうたう。

鉄馬の胡裘　漢営を出で
百道に分奪して竜城を救う
左賢いまだ遁れざるに兵竿は折れたり
過ちは将軍に在って兵に在らず

寃氣蒼茫成黒雲　(6906)

鐵馬胡裘出漢營
分奪百道救龍城
左賢未遁兵竿折
過在將軍不在兵　(6900)

竜城は匈奴の首長が竜神を祭る場所でかれらの本拠、ひいて朔北の地一帯をさす。左賢は匈奴の首長のひとり。これらの詩については拙稿「玉琴」「常建詩集校注」参照。

智謀と勇膽とが戦争の発生を未然に防ぐことこそ、真の剛毅というべきだろう。昌齡の「出塞」に、

秦時明月漢時關　秦時の明月　漢時の関
萬里長征人未還　万里長征して人いまだ還らず
但使龍城飛將在　ただ竜城の飛将をして在らしめば
不教胡馬度陰山　胡馬をして陰山を度らしめじ　101(6785)

これはかれの神品といわれる作の一つである。漢の将軍李広が右北平（河北省北部　熱河省南部）に駐屯すると　匈奴はかれを「飛将軍」とよんで恐れ、その地を侵さなかったと『史記』の伝にみえる。進むだけが戦いではない。「從軍行」に、

關城榆葉早疎黄　　關城の榆の葉は早くも疎らに黄なり
日暮雲沙古戰場　　日暮れて　雲も　沙も　古戦場
表請回軍掩塵骨　　表をたてまつり請わん　軍を回して塵にまみれし骨を掩い
莫教兵士笑龍荒　　兵士をして竜荒に笑かしむるなからんことを

146(6780)

忍耐して退き　必ずしも剛毅ではない多くの人々に離別の悲しみを強いないことも　将軍にとっての勇気であろう。だが　その剛毅と忍耐をそなえる将軍を挫折させるものが　辺塞の苦しみを知らぬところに存在し、辺塞を襲う。陶翰の「古塞下曲」にいう。

進軍す　飛狐の北　　進軍飛狐北
窮せる寇は勢まさに変ぜんとす　　窮寇勢將變
日落ちて沙塵昏く　　日落沙塵昏
河を背にしてさらに一戦す　　背河更一戰
騂馬は黄金の勒　　騂馬黄金勒
琱弓は白羽の箭　　琱弓白羽箭
左賢王を射殺し　　射殺左賢王
帰って奏す　未央殿　　歸奏未央殿
塞下のことを言わんと欲すれども　　欲言塞下事
天子は召見したまわず　　天子不召見

東に咸陽の門を出で　　東出咸陽門
哀哀として涙は霰のごとし　　哀哀涙如霰　　(6943)

将軍が言わんと欲した寒下の事には、たとえば冒頭が「塞下曲」にうたう次のような願いも含まれていただろう。

奉詔甘泉宮　　詔を甘泉宮に奉じ
總徵天下兵　　總て徵す　天下の兵
朝廷備禮出　　朝廷に礼を備えて出で
郡國豫郊迎　　郡国は予め郊迎す
紛紛幾萬人　　紛紛として幾万人ぞ
去者無全生　　去る者は生を全うするなし
臣願節宮廄　　臣願わくは　宮の廄を節したまい
分以賜邊城　　分ちてもって辺城に賜わんことを　　162(6672)

だが　未央宮に住む人たちにとっての関心は、戦争の勝利とその果実に集中し　塞下のことなどは聞きたくもない煩事、あるいは瑣事。辺塞の従事者は命によって戦えばよく　宮中の経済に干渉するなどもっての外、なのであろう。

天子が召見しないのは、まだしも将軍にとっての幸である。

秋風夜渡河　秋風に　夜　河を渡る
吹却雁門桑　吹却す　雁門の桑
遥見胡地獄　遥かに見る　胡地の獄
鞍馬宿厳霜　鞍馬　厳霜に宿る
五道分兵去　五道に兵を分って去き
孤軍百戦場　孤軍百戦場
功多翻下獄　功多くしてかえって獄に下り
士卒但心傷　士卒はただ心に傷む

塞下曲

024(6674)

雁門は山西省代県。鞍は弓箭手　それをはめた将兵をさすのだろう。
獄に下らぬ将軍の行く先にあるものもまた死である。

邊頭何慘慘　辺頭　何ぞ慘慘たる
已葬霍將軍　すでに葬りぬ　霍将軍
部曲皆相弔　部曲　みな相弔い
燕南代北聞　燕南　代北に聞こゆ
功勲多被黜　功勲あるもの多く黜けられ
兵馬亦尋分　兵馬もまたついで分たる

更遣黄龍戍　　さらに遣わさるるは黄龍の戍
唯當笑塞雲　　ただまさに塞雲に笑うべし

塞下曲　　163(6673)

霍将軍は漢の霍去病。剽悍無比の武人として塞外に名がとどろいた。ここでは辺地の将軍をかれにたぐえる。その死をいたみ、その武勇をたたえたのは　部下と、敵だけだった。将軍が死ねば、かれと労苦を共にした軍隊は、将兵も車馬もただちに分散され　さらに遠い地の護衛に派遣される。燕南　代北は雁門の北をさし、黄竜戍はさきの竜城　竜荒というあたりをさすのだろうか。この二首は西域をうたうのではないが　北であれ　西であれ　辺塞に勤務する者のなめる味は　ほとんど同じ苦酸だった。末句の「笑」は『文苑英華』『樂府詩集』『全唐詩』みな「哭」とし、そのほうが一見、通りはよいが、詩の味わいの深さ、諷刺の痛烈は「笑」には及ばぬ。

辺塞に行った昌齢は、そこで歓迎されただろうか。かれが心昂らせて歌う　次のような勇ましい「從軍行」を将兵はよろこんで合唱しただろうか。

大將軍出戰　　大将の軍出でて戦うとき
白日晴榆關　　白日　榆関に晴れたり
三面黃金甲　　三面は黄金の甲
單于腹背還　　単于　腹を破って還りぬ

090(6765)

勝利や酒のもたらす昂奮の中では歌うだろう。だが人はつねに酔っているわけではない。

蟬鳴桑樹間　蟬は鳴く　桑樹の間
八月蕭關道　八月　蕭関の道
出塞入塞寒　出塞　入塞　寒く
處處黄蘆草　処処　蘆草　黄なり
從來并幽客　從来　并　幽の客
皆共塞沙老　みな塞沙と共に老ゆ
莫作遊俠兒　遊俠の児となって
矜誇紫騮好　紫騮の好きに矜誇ることなかれ

022(6670)

この「塞下曲」の末の二句には　長安からふらりとやって来た昌齢を見る辺地勤務者の冷たい目の色が感ぜられる。昌齢は自分を遊俠児だとは思わなかったであろう。かれは　おのれをとりまいておおむね好意的なかれらが　それにもかかわらず、ふとしたときに見せるそれに　当惑し、反撥し、あるいは言いわけめいたことも言ったかもしれぬ。

しかし、いつでも立ち去れる者と、繋がれている者とでは「辺塞」から受けとる意味は異るはずである。かれらの目の色の冷たさは、その相異から生れるのであろう。繋がれている者から見れば、いつでも立ち去れる者は、遊俠児にすぎない。政治家　学者　詩人……それらのいずれで

あろうとも。

辺塞詩人とよばれる一群のひとたち、岑参　高適　李頎　王昌齢　王翰　王之渙らの作品は、一括して勇壮悲痛と批評されるが　おのおのの歌いぶりには差がある。それらについては分析・比較の作業もすでになされているが、まだ指摘されていないと思われる二三のことを記しておこう。

かれらの多くは下級の官吏か官吏になる前の知識人で　不遇のうちに辺塞にぶつかってこれを歌い　おおむねその生涯は不遇だった。これが第一である。

かれらは互いに、直接または間接に、友人であった。これが第二である。

かれらのほとんどすべてが　仏教信者であった。これが第三である。

もとより例外はある。岑参は嘉州刺史となり　高適は渤海県侯にのぼり死んで礼部尚書を贈られた。しかし、かれらが辺塞詩をうたった時期はその不遇の時であったことにかわりはなく　かれらが高官となったのは安禄山の乱後　朝廷そのものが一地方軍閥のような状態に下落した時代であったことは考慮に入れておく必要があろう。

ここ十年ほどの間に書かれた文学史では岑参などと王維などとの詩風をことさら対立させ　前者をロマン主義的現実主義とよび後者を反現実主義などとレッテルをはって分類することがはやったようだけれども　そんな分類でいつまでも通るほどこの詩人たちは単純素朴なひとたちではない。反現実主義の烙印を押された王維や常建が、いかにロマンティックな魂をもちレアリスティックな眼をそなえていたかは小林太市郎　原田憲雄『王維』拙稿「王琴」を読めば明らかであ

ろう。かれらは辺塞詩人とはよばれないけれども辺塞詩に数々の名作をのこしている。わたしがいまここでいう辺塞詩人には　王維や常建をもふくめていっているのである。

かれらが互いに友人であったことは　偶然といってしまえばそれまでだが　わたしの考えではそうではなく　かれらの志向の共通したことがかれらを辺塞に向わせ、辺塞体験がかれらを結びつけ　あるいは結びつきを緊密にしたのだろうと思う。

仏教がかれらを辺塞にむかわせたのか、辺塞がかれらを仏教にむかわせたのか。各人の特殊な事情がそこに加わり一様ではないであろうが、二つは相乗的に互いに他を深めたであろう。おそらく当時の儒教の中華意識　國家主義は、この進んだ精神たちには通用しなくなっていた。儒教が禽獣視する夷狄のうちに人間を見出したひとたちは　仏教のうちに満足しうる平等観の存在することを感じたのではないか。

さて　辺塞詩人といわれる岑参と王昌齢を比較してみると　岑の目はほとんど事物にむかい昌齢の目はいちじるしく心理にむかう。岑ももとより心理を無視してはいないが　かれが歌うのは事物から受けたおのれの感動であった。昌齢が詠ずるのは　人の心の動き　である。

即物的な岑の詩の描く西域は、探険家の記述する中央アジアに近く　地図に照してたどりやすい。昌齢の作に見える事物は、人々の心に辺塞を喚起する発條のように装置してあるので、その西域は、地図に合わせても必ずしもぴったりとはせぬ。しかしかれの詩は、辺塞の人の感情を手にとるように見せる。

昌齢は、辺塞に勤務する人たちがかれに向けた目の冷たさの語りかけている言葉に気づき、そ

の真実を悟ったのだ。「従軍行」に、

向夕臨大荒　夕べに　大荒に臨めば
朔風軫歸處　朔風　帰意をうごかす
平沙萬餘里　平沙　万余里
飛鳥宿何處　飛鳥　何処にか宿る
雲騎獵長原　雲騎　長原に猟し
翩翩傍河去　翩翩として河に傍いて去る
邊聲搖白草　辺声　白草を揺がし
海氣生黃霧　海気　黄霧を生ず
百戰苦風塵　百戦　風塵に苦しみ
十年履霜露　十年　霜露をふむ
鞍投定遠筆　定遠の筆を投ずといえども
未坐將軍樹　いまだ将軍の樹に坐せず
早知行路難　早く行路難を知りなんものを
悔不理章句　章句をおさめざりしを悔ゆ

定遠は後漢の班超にちなむ。超は『漢書』の著者班彪の子、班固の弟で『後漢書』の伝によ

036(6675)

ればは　母を養うため苦労し　のち「張騫は異国を探険して成功し大名となった。おれだって筆耕なんぞしておれるか」と、筆を投げうち、西域にゆき　やがて武功によって定遠侯に封ぜられた。

将軍の樹は『後漢書』馮異伝の記事にもとづく。異はすぐれた将軍だが、謙遜な人だったので、他の将校が功績のことで論議をはじめると、かれひとり　樹かげにひっこんでいた。

班超は「人となり志あり、細節を修めず」といわれた。冒頓はそこにおのれの性格と似たものを見、みずからをかれにたぐえたのだろうが、「いまだ将軍の樹に坐せずには、謙遜であろうがなかろうが、辺地勤務ではうだつが上らめ、といった口吻がみえる。そこから、末の二句を考えると　それは　現地の将校が冒頓に言ったであろう次のような言葉を、恐らく、そのまま作中に使ったのだろう。

「軍人の辺地暮しが、こうくだらねえものだと、もちっと早く知っていたら　どんなに苦労しても受験勉強して、都で役人になってたよ。お前さんのように文字のある男が、こんなところで朽ちることはねえさ。なに？　あなたがお気の毒？　おれの心配なんぞはいらねえよ。出世しても、ふんぞり返って栄耀栄華してくれなんぞ　言っちゃあいねえ。都のおえら方にここらの兵隊の辛さを思い出さすのも、役人の仕事じゃねえのか。そういう役人になれってことよ」

扶　風

冒頓は、辺塞を去って故郷に帰る。帰ってしばらくは　人々も珍らしがって　かれの話を聞く。

中には　にやにやしながらたずねる者もいる。
「しこたま　貯めこんできたんだろう。ええ」
あるいは、
「こちらに来てるのは大したことはないが、本場の　青い目の女は、凄いそうじゃないか……」
人々にとっての辺塞は、要するに　異国、である。好奇心を満足させたら、それの日常生活に帰る。向うで知りあった人の家族を訪う。大いに歓迎してくれるが、その人たちの関心は　夫や子がいつ帰れるかということだけにあって、辺塞一般ではなく　まして天下国家の大事ではない。愛する者の身の上は案じても、やはり、目の前の日々の生計に心忙しいそぶりが、見えてくる。
行くときとは違った使命感のようなものを抱いて　いそいそと帰ったかれも、故郷でおのれが他所者になっていることを見出す。かれの使命感は、人々には　辺境の人間の勇勝手とも、一旗あげそこねて帰った出稼ぎ人の負け惜しみとも、見えるらしい。ちぐはぐな空気の中では　語る言葉が外国語めいて　自分の耳にさえ変てこに響きはじめる。
三十に手がとどこうとして定職のない男にとっては　家庭は落着ける場所ではない。弟妹たちは　家長であるかれに対して、尊敬と愛情をむけるが、そのことが、早い就職を、かれに促しているように　感ぜられる。じっとしておれぬ。しかし、どうしようもない。自分が、「辺塞」そのものになってしまった感じがする。
そのとき、かれに　見えはじめる。「辺塞」は辺塞にだけあるのではないことが。自分と同じように「辺塞」になった人が　長安にも、いや、到る処にいて　世間の人たちと同じ日常生活を

いとなむために、その「辺塞」を包みかくすのを。かれらの生き方はどこかぎこちなく、さりげなく振舞えばそのさりげなさに、ふっと「辺塞」がにおう。辺地にゆく前には、全く気づかぬことだった。かれらの多くは、街ですれ違っても、目もくれない。しかし、かれらが冒頭の「辺塞」を嗅ぎとったことは　すぐに感じられた。かれらの中にも、他の人のいないところでは　なつかしげに語りかけてくる者もある。すると、それを避けたくなっている自分に　気づく。目が開けば「辺塞」もまた、じつにさまざまだった。

かれはふたたび家を出て、長安の西に九〇キロメートルほどの扶風のまちに下宿し、受験勉強をはじめた。何の意味もなさそうに思えてくる官吏社会にもぐりこむために。宿のおやじは　人相はよくないが、悪人ではなさそうだ。無口な男で　あの匂いがする。

試験が近づく。去年逼った癖ぶれを見てさほど秀れると思えぬが　さて　合格する自信があるわけではない。落第組は「情実さ」とそしる。そういう男が　逼った時にも同じ言葉を吐くだろうか。

くさくさするので酒を買って来た。手酌で飲む。いよいよみじめな気分におちいる。むかし、馮諼という男が政治ボス孟嘗君の食客となり　待遇がわるいので、刀のつかをたたいて歌った。

つかさんよ
帰ろうかい
膳にさかなもつかぬじゃないか

そんな話を『戦国策』で読んだことがある。だが、ここは下宿。おやじはボスではなく　自分

も大した宿料は払っておらぬ。つかを叩いたところで何処に帰れるものか。
「おい、おじさん。手があいてるなら一杯やらんかね」
めずらしいことに部屋にはいって来て、差し出す杯をあける。
「身寄りらしい人も見かけないが、独りじゃ、さびしいだろう」
すると、おやじの目から涙が流れ、語り出した。「扶風の主人の答えに代りて」はこの時の作である。

殺氣凝不流
風悲日彩寒
浮埃起四遠
遊子迷不歓
依然宿扶風
沽酒聊自寛
寸心亦未理
長鋏誰能彈
主人就我飲
對我還慨嘆
便泣數行涙

殺気　凝って流れず
風　悲しみ　日彩　寒し
浮埃　四遠に起こり
遊子　迷いて歓ばず
依然として扶風に宿り
酒を沽いて　聊か自ら寛うす
寸心もまだいまだ理らず
長鋏　誰かよく弾ぜん
主人　我について飲み
我に対して　また慨嘆す
すなわち泣く数行の涙

因歌行路難
十五役邊城
三回討樓蘭
連年不解甲
積日無所餐
將軍降匈奴
國使没桑乾
去時三十萬
獨自還長安
不信沙場苦
君看刀箭瘡
鄉親悉零落
冢墓亦摧殘
仰攀青松枝
慟絶傷心肝
禽獸惡不去
路傍誰忍看
幸逢休明代

よって歌う　行路難
十五　辺城に役せられ
三回　樓蘭を討ち
連年　甲を解かず
積日　餐うところなし
將軍　匈奴に降り
国使　桑乾に没せり
去る時　三十万なりしに
独りわれのみ長安に還る
沙場の苦を信ぜざるか
君　看よ　刀箭の瘡を
郷親はことごとく零落し
冢墓もまた摧殘す
仰いで攀ず　青松の枝
慟絶して　心肝　傷む
禽獸　悪しんで去らず
路傍　誰か看るに忍びん
幸いに休明の代に逢い

寰宇靜波瀾　寰宇　波瀾　静かになりぬ
老馬思伏櫪　老馬　しのびて櫪に伏す
長鳴力已殫　長鳴すれども力すでに殫きたり
少年與運會　少年は運と会わん
何事發惡端　何事ぞ　悪端を発する
天子初封禪　天子　初めて封禪し
賢良副羽翰　賢良は羽翰をつくろう
三邊悉如此　三辺　ことごとくかくの如くんば
否泰亦須觀　否泰も亦すべからく観るべし

015(6694)

おやじのことば。

「わしだって木の股から生れたわけじゃねえ。親もあれば兄弟もあった。十五で兵隊にとられ、楼蘭に三回もいった。鎧めぐひまもなく、食うや食わずの日が続いた。あげくのはてに将軍は匈奴の捕虜　国使は桑乾省で死んだ。行きは三十万　長安に帰れたのはわし一人さ。戦場がどんなに苦しいか。まあこの体を見なされ。こいつは刀傷、こちらは矢傷さ。さて帰って　親兄弟の姿はなし、墓場もめちゃくちゃ。ここがはたして故郷かと　松の木に上って眺めてみた。夏ヒこけた犬がすり寄って来て　くんくん鳴く。行きずりに見ても哀れな奴だが　わしだってこいつ

と変りゃしねえ。苦しかった。が、おかげで、世の中すこしは静かになった。ああして　こうして　と　思わぬじゃないが　この年じゃしようがない。お前さまはまだ若い。運はこれから。嘆くことはねえ。天子さまは封禅とやらをなさるげな。大臣も立派なお人がそろうたらしい。国のはてまでこの調子なら　先ゆき悪くもありますまい」

ここにいう封禅は　開元十三年十一月に玄宗が泰山に行幸して天を祭ったことを指すだろう。

睢　　陽

開元十五年　進士及第。汜水県尉となる。常建　李嶼が同時及第者であることは　さきに記した。

ついでながら、拙稿「玉琴」に書きもらしたことを記しておく。岑仲勉『唐人行第録』は『全唐詩』三函　劉長卿「送常十九帰嵩少故林」(7420)の常十九が常建だろうかと推測している。これが正しいならば　建は　河南省の嵩山少室峯に家居した人である。

王維はこの前後に洛陽の近くの県に勤務し　嵩山にもたびたび遊んだらしい。岑参は、やはりこのころ嵩山太室峯のふもとの登封県、少室山のふもとの潁陽に住み進士科受験の準備にかかっていた。

かれらの交渉がこのとき始っただろうと推察することはできる。しかし昌齢は　休む間もなく博学宏詞科受験の準備にとりかかっており　詩でこの時期の作と推測しうるものは「放歌行」(83

(6682) の一首にすぎぬ。これについてはのちに触れるつもりだ。かれの文の現存するものは六首、うち三首が賦、二首が判、一首がさきに一部を引いた「李侍郎に上る書」である。判の二首は進士科試験の答案であろう。賦の「公孫宏の東閣を開く賦」は博学宏詞科に合格したときの答案として知られ「灞橋賦」は合格しなかった時の答案であろう。「駅道を弔う賦 并びに序」は、少し後の作だろうと思われる。それならば この期間、県尉としての勤務に費す余力のほとんどすべては高級試験の準備に注いだのであろう。

ところで さきに少し触れたように 陶翰に「王大の抜萃に筭せずして睢陽に帰るを送る序」がある。抜萃は書判抜萃ともいい博学宏詞とならぶ一科である。王大を直ちに昌齢と定めることはできぬ。ただ、文を玩味し、二人の経歴を考えあわせると、推測は事実に近いように感ぜられる。序にいう。

才格は得て仰ぐべきなり。文章は知って畏るべきなり。故にさきの年、公連の捷ありき。九流の学は日に盛に 三鼓の音はいまだ歇まず。ことし天官の阨あり。天まさにきみをせに啓んとす。故に命ずるに才を以てし きみを亨きに授けんとす。故にまず屈するをもってす。屈伸は理なり、才位は時なり。きみ、しばらく豪翰を感激し 詞律を増修せよ。沖天の拳われら倚って待たん。歓洽はあに常ならん。離言は実に早し。河岳に西に別れ、悠なるかな鎬京。庭闈を東に瞻る。誰か家遠しと謂わん。草色まさに変ぜんとして 雲天は浩然たり。詩いて詠言し、まさにもって志を述べんとす。

「有公連之捷矣」というのが、わたしにはわかりにくいのだが 予備試験につづいて進士科の

試験に及第したことをさすのだろうか。「ことし天官の阨あり」とは　開元十七年十月一日　日食があり、ほとんど欠け、わずかに鉤のように残ったと『新唐書』天文志にしるすのをさすのではないか。それを落第のことにかけ　君のこのたびの失敗は　大きな成功にいたる前の試練だから、頑張りたまえ、冬来って春遠からず、と励ましているのである。

翰の序を昌齢に当てる推測は一つの疑問に逢うだろう。昌齢家居の地は長安であった。他の説の太原　江寧をとるにしても、いずれも睢陽とはかかわらぬ。しかも故郷ではないその地に「帰る」とは　いかなることか。

愛する者のいるところを「故郷」といい「故園」とよんだ当時の風習からすれば、睢陽もまた昌齢の「故郷」の一つであった、とわたしは考える。睢陽はいまの河南省開封の東南八〇キロメートル、春秋時代の宋国の首都、漢代に景帝の弟の孝王が封ぜられ、広大な庭園を築いた梁国で、太梁ともよばれる。昌齢に「太梁途中の作」047(6730)「梁園」123(6815)がある。「武陵の田太守に答う」080(6796)に「曾て太梁の客となる、信陵の恩に負かじ」という。田太守を魏の公子の信陵君にたぐえるのだ。信陵はいまの寧陵で、睢陽の東どなりのまちである。「客」という以上そこは仮寓にすぎない。しかし『新唐書』の伝に　昌齢が「世の乱るるをもって　郷里に還り、（あるいは、還らんとして）刺史閭丘曉に殺さ」れたというのが事実ならば　暁は睢陽の東南に約八〇キロメートルの亳州の刺史だったのだから、やはり睢陽を昌齢の「郷里」とするのであろう。このときなお昌齢の「親」が生存したことは、同じ伝中の記事で知られる。かれが「従軍行」036(6675)でおのれを班超にたぐえるところから見れば、父は早く死に、かれは寡婦となった母に仕え

「新を負い菽を啜った」のであろう。それならば睢陽は母の生家、あるいは縁故の地であったとも考えうる。母の所在は「故園」であろう。『新唐書』が「鄉里」というのは、たぶん事実だったのであろう。そうして陶翰の「睢陽に帰る」「王大」が昌齢であろうことも、まず間違いあるまい。

冥　数

ここではじめの鄭県での作にかえり、本稿(一)をしめくくりたい。

谷を出て五年たった今、「子爲黄綬羈」きみは黄綬につながる。この「子」は　第七句の「君」と同じく陶大をさすに違いない。『漢書』百官志によると二百石以上のかなりの高官が銅印黄綬を帯びたが、唐代では、黄綬によって丞や尉を称した。鄭大が鄭翰ならば、まだ丞にもならず尉であったろうか。羈は馬落頭　すなわち馬のおもがい　ひいて束縛すること。役人であることはその義務に束縛されることである。「余忝蓬山顔」われは蓬山の顔みられるを忝のうす。蓬山とは蓬萊山のこと　ここでは蓬萊宮をさす。本名は大明宮、天子の所在である。蓬山の顔とは　昌齢が博学宏詞科に合格し、校書郎に栄転したことを指すだろう。『唐才子伝』のいうように　陶翰が進士に登第した開元十八年の「次の年」に翰もまた博学宏詞科に合格しているのならば　この二句の表現はもっと違った形になっていただろう。答崔の賦の名の違いと共に問題のあるところである。陶翰の宏辞合格は昌齢より一年か二年おくれるのではないだろうか。

『初学記』に「華山は五岳の西岳なり」とい中国五名山の一つで　太華山ともいう。中峯を蓮華峯、東峯を仙人掌、南峯を落雁峯といい、これを華岳三峯という。また雲台・公主　毛女などの諸峯が中峯をとりまくので杜甫が「諸峯羅列して兒孫に似たり」とうたう。その西岳を望み長安の都門をたった。それが「京門望西岳」京門に西岳を望む、であろう。『爾雅』に「邑外はこれを郊という」といい　郝懿行の義疏に「説文に云う、国を距たること百里を郊となすと。これ王畿の千里なるに拠って言う。百里の国を設くれば、則ち十里を郊となす。郊に遠近あり。国をもって差となす」「百里見郊樹」とは、長安郊外百里の国道を美しい並木を見つつ来た、ということであろう。百里は実数ではない。長安から鄭県までは約八〇キロメートル。唐代の一里はざっと五六〇メートルだから　百里をこえるが　詩にうたう概数として実際をあまり隔たらぬところは　注意しておいていい。

「飛雨祠上來、霧然關中暮」飛雨は祠上より来たり、霧然として関中は暮れぬ。飛雨の句には斉の謝朓「觀朝雨」詩の「朔風は飛雨を吹き　蕭条として江上より来たる」が影をひいており　なおその向うに宋玉の「高唐賦」の朝雲暮雨、仙女への慕情がただよっているようなたたずまいである。『初学記』の華山の条にいう「郭緣生の述征記と華山記とにいう。山下は華岳廟より、柏を列ねて南行すること十一里。また東に廻りて三里　中祠に至る。また西南に出づること五里、南祠に至る。南　谷口に入ること七里　また一祠をまつる。また南に一里、天井に至る。天井を出でて東南に二里　峻坂に至る。また西南に出でて六里、また一祠に至る。胡越寺神と名づく」「霧露たり停雲　濛濛たり時雨」とは晉の陶淵明の「停雲」詩のはじめの句であった。「停雲は

親友を思えるなり」とはその序にのべるところである。「靄然として」と昌齢がうたうとき、関中を掩う暮色よりも濃密な友情が　神山にたちこめる雲雨に見まごうほど、かれをそそのかしていたのであろう。潘岳の「関中記」に「東は函谷関より西は隴関に至る二関の間これを関中という」いまの陝西省全域がほぼこれにあたるが、ここでは長安を中心とする平原をさす。

「駆車鄭城宿」車を駆せて鄭城に宿らんとす　る昌齢は、忽ちあの「古詩十九首」とよばれる漢代の無名氏の詩を思いおこしたであろう。その第三首にいう。

青青陵上柏
磊磊澗中石
人生天地間
忽如遠行客
斗酒相娯樂
聊厚不爲薄
駆車策駑馬
遊戯宛與洛

青青たり陵上の柏
磊磊たり澗中の石
人の天地の間に生くるや
忽として遠く行く客のごとし
斗酒もて相娯樂し
聊く厚しとして薄しとせざらん
車を駆り駑馬に策うち
宛と洛とに遊戯す

……

その第十三首にも、

駆車上東門
遥望郭北墓

車を上東門に駆り
遥かに郭北の墓を望む

白楊　何ぞ蕭蕭たる
松柏　広路を夾む
下に陳死の人あり
杳杳として長暮につく
黄泉の下に潜み寐ね
千載　永く寤めず
浩浩として陰陽うつり
年命　朝露のごとし
人生　忽として寄するがごとく
丘には金石の固きなし

白楊何蕭蕭
松柏夾広路
下有陳死人
杳杳即長暮
潛寐黄泉下
千載永不寤
浩浩陰陽移
年命如朝露
人生忽如寄
壽無金石固

墓場に向う道路のような人生に　ではなぜ車を駆って　鄴城に宿ろうとするのか。「古詩」の第十五首にいう。

生年は百に満たず
常に千歳の憂をいだく
晝は短く長の長きに苦しむ
何を燭を秉って遊ばざる

生年不満百
常懐千載憂
晝短苦夜長
何不秉燭遊

楽しめる時には楽しんでおけ、来年も生きておれるとは限らぬからな、というのである。魏の文帝が、呉質に与えた手紙にいう「少壮は真に努力すべし。年ひとたび過ぎゆけば何ぞ攀援すべけん。古人の燭を秉って夜遊ばんことを思いしは、まことにゆえあるかな」　古詩が遊楽の方に心をむけるのに反し、文帝のことばは努力せよといっている。人民の意志をおのれに従わせようとする権力者としてはさもあるべきだろうが、引きずられる人民にとっての真実がそこにあるかどうか。下っぱとはいえ文帝王の側近に座をしめたいま、昌齢は、古詩の感情をうべないつつも、文帝の論理を一概にすてさることもできめ。それは、おのれの今と昔がかわったためか、世の中のそれが変化したためか、あるいは……そういったことを論じうるのは昔のおのれを知る人に今のおのれを見てもらうほかはない。「秉燭論往素」燭をとって往素を論ぜんとす。往素は、往古と平素と、というほどの意であろうか。『韓詩外伝』七に「往古は今を知るゆえんなり。

「山月出華陰」山月は華陰より出ず。華陰は華山の北。そこには華陰県がある。いま陝西省渭関県の西にあり、鄭県の東三〇キロメートルである。岑参の「華陰の東郭の客舎に宿り関防を憶う」詩に「関月は首陽に生じ　照見す華陰の祠」(9508)とうたう。このあたりの月の出はことに詩人たちを感動させる美景であったとみえる。「聞此河渚霧」この河渚の霧を聞く。晋の衛瓘は桑広に会いその議論に感心して　雲霧を披いて青天を覩るがごとし、といった。そんな話が『世説新語』賞誉篇にみえる。河渚の霧を聞くのは月光だが、その光を友にたぐえるのだ。それが「清光比故人　豁達展心晤」清光故人に比し　豁達心を展いて晤る、である。潘岳の「西征賦」に「の漢の高祖の興るをみるに、ただに聰明神武　豁達大度なるのみに非るなり」晤は相対して語る

こと、さきに[illegible]ページ引いた阮籍の詩にも用いられた語である。

「馮公尚戢翼」馮公はなお翼を戢む。馮公は、顯にいう馮六。陳琳の「曹洪の馮に世子に与うる書」に「それ緑驥の耳を掮牧に垂れ　鴻雀の翼を汙池に戢むるとき、これに哀るる者は、もとより　園囿の凡鳥　外厩の下乘とおもえるなり」という。馮氏は大才をもちながら、まだそれを発揮する条件をえていない。「元子仍跼歩」元子は顯にいう元二。『史記』淮陰侯伝に「騏驥の跼蹐するは駑馬の安歩するにしかず」馮　元二氏とも、にまだ進士の試験にも登第していないことをこのようにいっているのに違いない。

「拂衣易爲高　論迹難有趣」払衣は立ち去ること。謝霊運の「述祖德詩」に「七州の外に高揭し、衣を五湖の裏に払う」官途につかないつもりなら、その事を高尚にすることはやさしい、というのが、衣を払えば高をなし易し、である。論迹とは　曹植の「潛志賦」に「退いて身を隠してもって迹を滅す」という滅迹と同じく隠居することをいうのであろう。迹を論めて趣ありがたし　とは、それも一つの生き方だが、知識人としては張合いのないことではないか、というけどの意であろう。「古詩」の第七首には「昔の我が同門の友　高挙して六翮を振う。手を携えし好を念わず、我を棄つること遺跡のごとし」という。だがわたしはそんな軽薄ではとらめ。第五首の「顧わくは双黄鵠となって、翅を奮い起って高く飛ばんことを」こそ、きみたちに望んでいるのだ、というのが昌齢の本意であったろう。だが宏詞に合格したばかりの意気洋洋たるかれの口から出る言葉が「翼を戢め」「跼歩」しているふたりにかれの本意通りに響き通じたかどうか。

漢の張良は、高祖が兵を挙げたとき、その参謀となり、高祖が即位して　留侯に封ぜられたが、

赤松子なる仙人について神仙の術を学び、権力闘争から遠ざかった。春秋の范蠡は、越王句践をたすけて、越を当時の五大国の一つとなるまでにしあげたが、句践の人がらが、苦労は分ちあえても成功を分ちあえないことを見ぬき、去って斉にゆき、姓名を変じて鴟夷子皮と、のちまた去って陶にゆき、陶朱公と称し、実業に従事して巨万の富をなした。共に出処進退を得た人として知られる。「張氏善終始　吾等豈不慕」張と范とは終始を善くせり　吾等あに慕わざらんや。

馮六と元二がまだ血気盛りの青年で　鬱々の志と諤々の弁をもっていたとするならば、昌齢のこの詩のうたい出しと、いまここにもち出された意見との間に、矛盾を見出し、中年の教員の実際的なことばを体制に奉仕する奴隷のことばとして糾弾する学生のように、昌齢をはげしく論難したかもしれぬ。そうして昌齢の心の底から叫び上げたいことを、馮・元ふたりと同じ　あるいはもっとはげしい言葉であろうのに　進士に及第し　博学宏詞に合格したことが、この青年たちの前では、罪のような意識をさえ、昌齢の心によびさまし　平生の熱っぽい論理がいっこうに燃えたたぬ、というようなことでもあったろうか。

「羅酒當涼風　屈伸偏冥數」酒をやめて涼風に当らん　屈伸は冥数に備われり。酒はおしまいにして涼しい風にあたろうか、というようなことは、この会合の主の陶大がいうべき言葉ではなかろうか。主のあいさつも待てずに、客の昌齢がいったのか。あるいは主がいいかけると、それを待ちかねたようにかれもいい　立ちあがって、屈伸は……と呟いたのだろうか。

『文子』微明に「内に一定の操ありて　外によく屈伸せば、物と推移す」という。昌齢はおのれの内なる操の一定を、自ら信じたであろうが、外によく屈伸するであろうか。江淹の「雜体詩」

劉太尉偶乱に「治乱はただ冥数」とうたい　李善の注に「冥は幽冥なり　数は厤数なり」という。目に見えないところで定まった運命である。それならば、かれの屈伸もまたすでに一定しているのか。定った運命の中に　定った操守をもつ詩人は、何を　いかに歌って、生きてゆくのか。

（一九七〇・四　一八―九　二一）

正　誤

42ページ　末行　「おかえ　しに」を「おかえしに」と訂正。　43ページ、5行　「何の咎」を「何かの咎」と訂正。　55ページ　12行　「漢民」を「漢人」と訂正。　69ページ、3行　「意下」を「塞下」と訂正。　77ページ　5行　「それの日常生活に」を「それぞれの日常生活に」と訂正。　83ページ、5行　「後ー作」を「後の作」と訂正。　88ページ、16行　「長の長き」を「夜の長き」と訂正。　17行　「何を燭を」を「何ぞ燭を」と訂正。　89ページ、10行　「ゆえんなり。」の。を」と訂正。

『方向』第十四号「王昌齢伝」付記

二六ページ、二七ページの「作者の辺」の作者とは、禅録などに見える用法からすれば、「実力者」「有力者」というほどの意だ、ということを、柳田聖山氏の示教によって知った。それならば、作者は王昌齢とは直接の関係はないことになる。空海が『詩格』を入手した場所も長安であるか越州であるかその他の場所であるかは、にわかには推理しがたい。

柳田氏に感謝し、これを付記する。

一九七一年八月二十三日

方　　向

1971年 8 月20日

発行所

方　向　社

(〒602)　京都市上京区下長者町通千本西入

福島町　妙徳寺内

電話　京都(075)463 6967 * 振替　京都7232

*

出　版　目　録

原田憲雄・

南の風	詩集	300	〒45

原田禹雄・

錐体外路	歌集	250	45

原田　麥

野の饗宴	詩集	350	45

・原田千美・

桃乗集	歌集	250	70

*

雑　誌

李賀研究	原田憲雄個人雑誌 隔月刊	200	35
方　向	不定期刊		不定

*